

最終更新 2025 年 10 月

注：本資料は Deloitte の IFRS Global Office が作成し、有限責任監査法人トーマツが翻訳したもの
です。
原文と翻訳とで解釈に相違が生じた場合は、原文が優先されます。原文は[こちら](#)からご覧ください。



iGAAP in Focus

Closing Out – 財務報告およびサステナビリティ報告の重点領域

目次

[マクロ経済と地政学的環境](#)

[不確実性と財務報告](#)

[財務諸表における気候関連リスク](#)

[サステナビリティ報告の動向](#)

[通貨と超インフレ](#)

[主な新たな会計上の要求事項](#)

[その他の報告に関する検討事項](#)

[期中財務報告](#)

[付録](#)

詳細は、下記 Web サイト参照

[Deloitte IAS Plus](#)

[デロイトトーマツの Web サイト](#)

[IFRS 基準別の解説](#)

企業は、マクロ経済および地政学的環境による重大な不確実性に依然として対処している。投資家および規制当局は、企業がこの困難な状況にどのように対処しているかについて透明性を確保することを期待している。

本 iGAAP in Focus「Closing Out」では、現在の環境を考慮して、関連性がある可能性のある財務報告およびより幅広い企業報告の問題を示し、規制上の焦点となる分野および会計基準の最近の変更、一貫性があり、比較可能で適時なサステナビリティ関連情報に対する投資家の需要の高まりについても強調している。

マクロ経済と地政学的環境

世界貿易

新たな関税の導入および世界貿易への他の影響は、財務報告の複数の側面に影響を与える可能性がある。

例えば、既存および新規の／提案された関税は、すべての企業（輸入企業および輸出企業）に、次のように影響を与える可能性がある。

- 供給コストの増加。これは、為替の調整および代替の供給源を見つけるおよび／またはコストを顧客に転嫁する能力により、利益マージンに影響を与える可能性がある。
- 価格戦略の変更。これは、価格の感応度が高い製品に対する消費者の需要に影響を与える可能性がある。
- 新しい機器、技術および施設への設備投資の遅延または削減、または事業の移転による設備投資の増加
- サプライチェーンを適応させるための物流コストおよび移行コストの増加

- 在庫レベルおよびそれに伴う保管コストの一時的な増加または関税を回避するために輸送中に足止めまたは紛失した棚卸資産
- 「不可抗力」条項または類似の契約条項の発動による契約の取消しまたは修正
- 訴訟費用の増加、例えばサプライヤーと顧客との間の紛争によるもの

さらに、現在の世界貿易の状況は、インフレ、外国為替レートのボラティリティ、商品価格の変動、金融市場の混乱、借入金利の上昇などのマクロ経済の不確実性の一因となっている。

その結果、企業は、関税の影響を直接的または間接的に受けるかどうかにかかわらず、将来のキャッシュ・フローの予測および財務諸表の作成に使用されるその他の見積もりに関連する重大な課題に直面する可能性がある。例えば、財務報告の以下の側面が影響を受ける可能性がある。

- 非金融資産の減損。例えば、上記で強調したサプライチェーンの課題により、企業は棚卸資産を正味実現可能価額に評価減することが要求されるかどうかを評価することが要求される可能性がある。さらに、関税の変更は、IAS 第 36 号「資産の減損」を適用する減損テストが要求されることを示している可能性がある。
- 不利な契約の引当金。例えば、棚卸資産価格の増加を顧客に転嫁できない場合
- 金融資産の減損。企業は、新たな不確実性の源泉を組み込む、または考慮するシナリオに異なるウェイト付けを帰属させるために、モデルに変更が要求されるかどうかを検討する必要がある場合がある。
- 法人所得税、特に繰延税金資産の回収可能性、および期中財務報告における見積年次実効税率
- 収益認識
- 継続企業

これらの各領域、およびその事実と状況に基づいて企業に関連性がある可能性のある他の領域については、このニュースレターで取り上げられている。さらに、急速に変化する環境では、企業は、報告期間の末日の後、財務諸表の承認日より前に利用可能になった情報を慎重に評価しなければならない（後発事象を参照）。

さらに、企業は、関税の直接的な影響を受ける企業に経済的支援を提供するために導入される可能性のある政府のスキームをモニターし、関連する会計上の影響を考慮しなければならない。

全般的なインフレと金利上昇

一部の経済では現在、インフレ率および金利は安定または低下し始めていたものの、最近の地政学的な環境の変化は、インフレの新たな上昇に寄与する可能性がある。その結果、企業が関連するリスクにさらされ続けているため、以下の検討事項が引き続き適用される可能性がある。

非金融資産の減損に関して、IAS 第 36 号は、資産が減損している可能性を示す兆候として、市場金利の上昇を識別している。これは常に当てはまるとは限らない。例えば、市場金利の上昇が問題となっている資産の割引率に影響を及ぼさない場合（例えば、短期金利の変動が長期資産に要求される收益率に影響を及ぼさない場合）、または企業が顧客に請求する価格を通じて、より高い金利を回収することを見込んでいる場合、または金利の上昇が小さく、資産の回収可能価額が帳簿価額を上回るヘッドルームについて懸念が生じることがない場合である。しかし、減損損失の可能性は見逃してはならず、金利の全般的な上昇は、完全な減損レビューが要求されるかどうかを適切に検討することにつながるはずである。

インフレは、廃棄義務のような長期引当金の測定に影響を与える可能性がある。企業は、引当金の測定に使用するインプットが、インフレの影響を組み込む際に整合したアプローチに従うことを確保しなければならない。インフレの影響を含む名目キャッシュ・フローは名目レートで割り引くべきであり、インフレの影響を除いた実質キャッシュ・フローは実質レートで割り引かなければならない。

インフレとその結果としての生活費の増加は、製品が手頃な価格でなくなる可能性がある（生産コストの増加または顧客の購買力の低下のいずれかのため）。正味実現可能価額への棚卸資産の評価減、および利益を得て販売できない棚卸資産の購入コミットメントに関する不利な契約の引当金の認識が要求される場合がある。インフレ、特に昇給率は、IAS 第 19 号「従業員給付」に基づいて会計処理される確定給付債務の測定に織り込まれる重要な数理計算上の仮定である。インフレが見積りの不確実性の主要な発生要因である場合、企業は、感応度分析のような、IAS 第 1 号「財務諸表の表示」125 項から 133 項で要求される情報を開示する必要性を検討しなければならない。

金利とインフレの両方が、IFRS 第 16 号「リース」に基づくリース負債および使用権資産の測定に影響を与える可能性がある。また、借手の債務返済能力が低下するため、信用損失への追加のエクスポージャーにつながる可能性があり、その結果、次のようになる。

- 借手の生活費の増加により債務不履行のレベルが増加する可能性があると予想される場合、IFRS 第 9 号「金融商品」に基づいて認識されることとなる予想信用損失が増加する。金融機関が使用する予想信用損失モデルの変更、またはそれらのモデルを補完するための「マネジメント・オーバーレイ」には、財務諸表の利用者が将来のキャッシュ・フローの金額、時期および不確実性に対する信用リスクの影響を理解できるようにするために開示を伴わなければならない。
- 金融機関以外の企業において、顧客が未払額の支払いに苦悶し、不良債権の増加が見込まれる場合、予想信用損失はより重大（significant）になる。

エネルギー価格の変動

エネルギー価格の変動および気候変動の影響を低減するための対策を講じる法域を背景に、企業は電力購入契約（PPA）のような再生可能エネルギーの長期契約を締結することが増えている。

フィジカル PPA は、再生可能エネルギー発電施設（風力発電所や太陽光発電所など）で発電された一定量の電力を、一定期間にわたって固定価格で購入することに合意する契約である。通常、再生可能エネルギー発電施設の所有者または運営者である売手は、買手の敷地または買手に代わって送電網に電力を供給することに合意する。通常、買手は再生可能エネルギー発電事業者から再生可能エネルギー・クレジット（REC）も受け取る。再生可能エネルギー源から発電される電力の時期／量は予測可能でない可能性があり、PPA で契約した電力の一部が買手が必要としない時期に生産された場合、買手は売却することが要求される。

PPA が IFRS 第 16 号に基づく発電設備のリースであるかどうか、そうでない場合、契約が IFRS 第 9 号 2.4 項の「自己使用」の要求事項を満たしているかどうか（その場合、PPA は IFRS 第 9 号に基づくデリバティブではなく未履行契約として会計処理される）の評価を含む、フィジカル PPA の適切な会計処理の評価は複雑になる可能性がある。PPA をどのように会計処理するかの評価では、例えば、買手が売却する電力の頻度または量が自己使用の要求事項を満たさないかどうかを判断する際に、経営者が重大な判断を下すことが要求される場合がある。したがって、買手は、企業の会計方針を適用する過程で行った判断のうち、財務諸表で認識されている金額に最も重大な影響を与えるものに関する、IAS 第 1 号 122 項の開示要求を検討しなければならない。さらに買手は、PPA の主要な条件（例えば、価格、期間および契約電力量）と、契約を締結する企業の目的を開示することを検討しなければならない。

また企業は、発電量ごとの契約の固定価格と定期的な決済日における電力のスポット市場価格との差額を反映した金額で、定期的に現金で純額決済するバーチャル電力購入契約（VPPA）を締結する場合もある。通常の VPPA では、フィジタル PPA と同様に、買手は特定の数の REC を受領する。

フィジタル PPA と同様に、VPPA が IFRS 第 9 号 2.4 項の「自己使用」の要求事項を満たしているかどうかの評価が要求される。しかし、VPPA では、契約に基づいて引き渡されるのは REC のみであり、その結果、「自己使用」の評価は REC にのみに関連する。電力価格にリンクする変動価格要素は、密接に関連していない組込デリバティブを表す。REC の購入が「自己使用」の要求事項を満たし、未履行契約として会計処理される場合、密接に関連していない組込デリバティブは、純損益を通じて公正価値（FVTPL）で別個に会計処理される。理論的には、密接に関連していない組込デリバティブをスポット・レートによる可能性の非常に高い電力の購入のヘッジ手段として利用するヘッジ関係を確立できるかもしれないが、実務上、契約の量（想定元本）の変動性により、達成される可能性は低い。

2024年12月、IASBは、再生可能電力を購入し引渡しを受ける一定の契約に適用されるIFRS第9号における自己使用およびヘッジ会計の要求事項を修正する「自然依存電力を参照する契約」を公表した。—[主な新たな会計上の要求事項](#)を参照。

不確実性と財務報告

不確実性のある時代における開示

不確実のある時代に報告する際、財務諸表の利用者に、不確実性が企業の財政状態および財務業績に与える影響を理解できるようにする、関連性がある企業固有の情報を提供することが特に重要である。これには、企業が不確実性の影響にどのように対処したか、また財務情報を作成する際に行われた主要な仮定および判断に不確実性をどのように組み込んだかについての適切な洞察が含まれる（以下を参照）。

この情報を開示する際に、企業は、例えば「地政学的な不確実性」への一般的な言及を避け、代わりに、それらに影響を与える実際の進展および事象、判断および仮定について具体的に説明しなければならない。また、企業は、見積りおよび測定に使用されるリスクおよび仮定、および年次報告書の他の場所に含まれる情報に一貫性を確保する必要がある。

さらに、IFRS会計基準の具体的な開示要求を準拠することに加えて、IAS第1号31項により要求されるように、財務諸表の利用者が、特定の取引、その他の事象および条件が企業の財政状態および財務業績に与える影響を理解できるようにする必要がある場合、企業は追加の開示を提供するべきかどうかを検討しなければならない。これには、関連性があるすべての事実と状況の判断および考慮が要求される。

重大な判断および見積りの不確実性の主要な発生要因の開示

企業の特定の状況に応じて、本ニュースレターで解説している領域の多くは、IAS第1号122項から133項によって開示が要求される可能性がある、項目または取引の特性、またはその測定に関する見積りの不確実性の発生要因に対する重大な判断が生じる可能性がある。

合理的に考え得る結果の範囲に基づく感応度分析を含む、主要な仮定について提供する開示は、報告日における状況を反映しなければならない。主要な仮定またはそれらの仮定に対する合理的に考え得る変化の範囲が、修正を要しない後発事象の結果として重大な影響を受ける場合、財務上の影響の見積りを含む、当該変化に関する情報を別個に提供しなければならない。

見積りの不確実性に関しては、翌事業年度中に資産および負債の帳簿価額に重要性のある修正の重大なリスクがある（したがってIAS第1号125項に基づく開示が要求される）見積りと、より長い期間にわたって資産および負債に影響を及ぼす可能性のある（したがって、当該項の範囲に含まれないが、別個に開示することが有用である可能性がある）見積りとを区別することも重要である。

見積りの不確実性の高品質の開示を行う上では、以下のことも重要である。

- 重要性がある修正のリスクがある特定の量を定量化する。
- 利用者が経営者の最も困難、主観的または複雑な判断を理解できるようにするために、仮定および／または不確実性の説明に十分な粒度を提供する。（これは、提供する情報が企業固有であることを要求する。）
- 他の見積りの開示および関連する感応度を、重大な見積りと明確に区別し、それらの関連性を説明する。
- 重大な見積り（本ニュースレターで解説されている経済的要因により、前報告期間よりも広範になる可能性がある）について、意味のある感応度および／または合理的に考え得る結果の範囲を提供する。これらは、特定のIFRS会計基準で要求されるものに限定するべきではない。
- 投資家がその影響を完全に理解するためにこの情報を必要とする場合、重大な見積りの基礎となる仮定を定量化する。
- 不確実性が未解決のままである場合、過去の仮定の変更を説明する。

最後に、重要性がある会計方針の開示は、企業固有のもの、すなわち、企業が適用する会計方針および評価方法を含めなければならない。

[IFRS in Focus「主要な判断と見積りの開示にスポットライトを当てる」](#)は、重大な判断および見積りの不確実性の主要な発生要因の開示についてのより詳細を解説している。

継続企業

経済的圧力または変化により、ビジネス・モデルが実行不可能になったり、必要な資金調達へのアクセスが制限されたりする可能性がある。このような状況では、報告日から少なくとも 12 か月間継続企業として存続できないかどうかを評価する必要がある。（一部の法域では、現地の規制によりこの期間が延長される場合がある）。この評価を行うにあたり、経営者は財務諸表の承認日までに入手可能なすべての情報を考慮に入れる必要がある。

企業が「継続企業」であるかどうかを評価するには、通常、次の要因を考慮することが要求される。

- 予測される業績が、企業の利用可能な借入枠に対して適切なレベルのヘッドルームおよび関連性があるローンの特約条項の遵守につながるかどうか。
- 予測可能な将来に対して十分なコミットされた借入枠の利用可能性、および貸手がこの資金を提供できないという兆候があるかどうか。

経営者は、新たな世界貿易の圧力および他のマクロ経済の不確実性が企業の特定の状況、特に既存および新規の資金調達ファシリティへのアクセスを含む現在および潜在的なキャッシュのリソース、ファクタリングおよびリバース・ファクタリング契約に与える影響を考慮しなければならない。そのようなファシリティおよび契約へのアクセスおよび使用は開示しなければならない。

経営者が、企業が継続企業としての存続能力に対して重大な疑義を生じさせるような重要性がある不確実性を発見した場合には、IAS 第 1 号 25 項は、企業が財務諸表においてそれらの重要性がある不確実性を開示することを要求している。開示は例えば、不確実性がいつどのように具体化するか、およびそれが企業の資源、営業、流動性、および支払能力に与える影響を説明するなど、企業自身の状況に固有のものでなければならない。企業が継続企業であるかどうかを判断する際に使用する仮定は、財務諸表の他の領域で使用する情報（例えば、流動性リスク管理の開示、非金融資産の減損、繰延税金資産の認識）と整合していかなければならない。現在の不確実性を考慮すると、企業は、とりわけ、現在および予想される収益性に関連する幅広い要因を考慮する必要がある。

ある企業が、計画した軽減策の実行可能性および有効性を含むすべての関連性がある情報を考慮した上で、IAS 第 1 章 25 項に基づく開示が要求される継続企業としての存続能力について実質的な疑義を生じさせる重要な重要性がある不確実性がないと結論づける場合がある。しかし、現在の環境では、その結論に達するには、考慮すべき結果の範囲およびそれらの結果に割り当てられた確率について重大な判断が必要になる場合がある。さらに、起これ得る結果の範囲およびそれが企業の将来の営業に与える影響は広範囲にわたる可能性があり、起これうる結果を多かれ少なかれ加重すると、重要性がある不確実性の存在に関する企業の結論に違いが生じる可能性がある。

2014 年 7 月の IFRIC アップデートで示されたように、企業が継続企業として存続する能力について重要性がある不確実性がないと結論付けたが、この結論に達するのに重大な判断をする場合、重大な判断の開示が要求される。このような開示は、財務諸表の利用者に、流動性、実行可能性および支払能力に対する圧力を理解するための十分な情報を提供するために重要である。

iASB は、2021 年に継続企業の評価および関連する開示要求に関する教育的資料を公表し、2025 年に更新した。このガイダンスは、デロイトの [iGAAP in Focus 「IFRS 財団は、継続企業の評価に関連する IFRS 基準の要求事項に関する教育的資料を公表」](#) に要約されている。

非金融資産の減損

IAS 第 36 号の要求事項の対象である資産

IAS 第 36 号の要求事項の対象となる資産の範囲は、広範囲にわたる。これには、有形固定資産（取得原価または再評価額で計上）、無形資産（取得原価または再評価額で計上）、のれん、使用権資産（取得原価で計上した場合）、投資不動産（取得原価で計上した場合）、生物資産（取得原価で計上した場合）、および持分法を使用して計上された関連会社および共同支配企業に対する投資が含まれる。企業の個別の財務諸表では、（IFRS 第 9 号に従って会計処理されたものを除く）子会社、関連会社、および共同支配企業に対する投資も IAS 第 36 号の要求事項の対象となる。

特定の資産（のれんを含む）について年次の減損テストを実施する要求事項に加え、IAS 第 36 号は、各報告期間の末日（期中報告日を含む）に、（IAS 第 36 号の適用範囲に含まれる）資産が減損する可能性があることを示す兆候があるかどうかを評価することを、企業に要求している。本基準は、資産が減損している可能性があるかどうかを評価する際に、企業が考慮する必要がある内部および外部の兆候を定めている。これらの兆候は、網羅的なリストを意図したものではない。企業は、現在のマクロ経済環境や地政学的な環境が自社の事業に与える影響など、自社の事実と状況を考慮し、報告日に減損テストを実施すべきかどうかを評価する必要がある。新しい関税または関税の引上げ、およびそれらが販売、供給コストおよび事業の再編などの項目に与える影響は、資産が

減損している可能性があるという兆候を引き起こす可能性がある。それで減損損失が認識された場合、それにつながった事実と状況は開示しなければならない。

企業は、非金融資産の回収可能価額を見積もる際に、割引キャッシュ・フローにしばしば依存する。キャッシュ・フローの予測、成長率および割引率を慎重に検討することは、減損の計算の裏付け可能性および合理性の観点から重要である。

予測キャッシュ・フローは、報告日時点で存在していた条件について合理的に知り得たことに基づくべきである（重要なのは、使用価値の計算の場合、報告日に企業が未だコミットしていなかったリストラクチャリングの影響を除外することである）。したがって、企業は、報告における新しい関税または既存の関税の変更（例：税率の増減、適用の延期）によって、主要なインプット（例えば、販売価格および数量、売上総利益率）が直接的および間接的にどのように影響を受けるかを合理的に見込み得るかを検討しなければならない。報告日に制定されている関税に加えて、報告におけるキャッシュ・フローの予想される変動が合理的で裏付け可能な仮定に基づいている場合、報告日にまだ制定されていない関税を企業が反映することも適切である可能性がある。報告日後の新しい関税または既存の関税の変更の発表の影響についての解説は、[後発事象を参照いただきたい](#)。

起これ得る結果の範囲によっては、以下で詳しく解説するように、将来のキャッシュ・フローおよび回収可能価額の経営者の最善の見積りを達成するために、複数のシナリオおよび確率加重の期待アプローチを使用することが適切な可能性がある。減損分析において将来のキャッシュ・フローに関する不確実性を織り込むことには、重大な判断が要求される。関連性がある場合、企業は、関税の予想される直接的および間接的な影響が減損分析にどのように反映されているかについて、明確な開示を提供しなければならない。

使用する割引率は、市場参加者が同様のリスクの投資に期待するレートの推定値である。このような不確実性のある時代には、経営者は、資産（または資金生成単位（CGU））の回収可能価額を見積るために必要な予算および予測を作成する際に重大な課題に直面する可能性がある。経営者は、予想キャッシュ・フロー・アプローチを使用することが、回収可能価額の見積もりにおける不確実性の複数の側面を反映する最も効果的な手段であると判断する場合がある。このアプローチは、単一の期待される結果ではなく、可能性のあるキャッシュ・フローに関するすべての期待を反映している。期待キャッシュ・フローのアプローチは、将来キャッシュ・フローの推定値に確率を割り当てることに大きく依存するが、それでも、インプットに関するそのような判断は、より恣意的であり、調整の量を裏付ける証拠となる根拠がない割引率に「不確実性」のリスク・プレミアムを追加するよりも、より透明性が高く、基礎となる商業的期待により容易に結びつく可能性がある。企業は、二重計上または省略を避けるために、キャッシュ・フローの見積りおよび適切な割引率の選択に整合した仮定が使用されていることを確認しなければならない。割引率およびキャッシュ・フローに使用される仮定は、特定の計算の中で内部的に整合し、また異なる目的で実行される計算間でも整合していくなければならない。

のれんまたは耐用年数が確定できない無形資産が CGU に含まれる場合、IAS 第 36 号は、CGU の回収可能額を測定するために使用した主要な仮定に関する情報の開示を要求しており、これには、各主要な仮定に割り当てた値を算定するために使用するアプローチ、およびそれらが過去の経験または外部情報源を反映しているか（または異なるか）が含まれる。さらに、新たな進展または不確実性は、主要な仮定についての合理的に考え得る変更により、CGU の帳簿価額が回収可能額を上回ることとなり、IAS 第 36 号 134 項(f)に基づく開示が必要になる可能性があるかどうかの評価に影響を与える可能性がある。

上記に加えて、減損テストの実施に用いる主要な仮定は、重大な見積りの不確実性の発生要因となる可能性が高く、したがって、IAS 第 36 号が要求する情報は、IAS 第 1 号 125 項から 133 項が要求する情報（のれんの減損テストに関して要求されるもの以外の感応度分析のように）によって補足する必要があるかもしれない。

デロイトの [A Closer Look「IAS 第 36 号非金融資産の減損 – リマインダーとホット・トピック」](#)は、IAS 36 の適用に関する一般的な質問に回答し、潜在的な落とし穴に対処し、本基準の特定の主要な要求事項をリマインドしている。

棚卸資産の評価

関税のような輸入税は、関連する棚卸資産の原価に反映しなければならない。

IAS 第 2 号「棚卸資産」を適用して、棚卸資産は、その原価と正味実現可能価額（NRV）のいずれか低い方の金額で測定される。NRV は、「通常の事業の過程における見積売価から、完成までに要する原価の見積額および販売に要するコストの見積額を控除した額」と定義される企業固有の測定値である。不確実性のある経済環境では、NRV の計算はより難しくなり、より詳細な方法または仮定が要求される可能性がある。新しい関税または関税の引上げの結果として、棚卸資産項目の NRV は、仕掛品の作業を完了するための原価の見積額の増加、または顧客への価格を引き上げることができないことを含め、多くの理由でその原価を下回る可能性がある。IAS 2 は、棚卸資産の評価減、または以前の評価減の戻入れの開示も要求している。

さらに、サプライチェーンの混乱が正常生産能力で生産設備を運転する能力に影響を与える場合、製造業の企業は、固定製造間接費の吸収のための実務を再評価しなければならない可能性がある。IAS 第 2 号は、変動製造間接費は、生産設備の実際使用量に基づいて各生産単位に配賦することを要求している。また、生産設備の正常生産能力に基づいて、各生産単位に固定製造間接費を配賦することを要求しており、生産水準が異常に低いまたは遊休設備のために配賦しなかった固定製造間接費は、発生したときに費用として認識される。

金融リスクの開示

金利、為替およびインフレ・リスク

前述のように、現在の世界貿易の状況は、インフレ、外国為替レートの変動および借入金利の上昇のような、マクロ経済の不確実性の一因となっている。

関連性がある場合、企業は、マクロ経済環境の変化が金融リスク・エクスポージャーにどのように影響するか（特定のローン・コミットメントのような、財政状態計算書で認識されていない一部の金融商品から生じるエクspoージャーを含む）、およびこれらのリスクをどのように管理するかを説明することが期待されている。

例えば、変動金利の金融負債により金利リスクに晒されている企業は、合理的に可能性のある金利の変動によって純損益および資本にどのような影響があるかを示す感応度分析を提供する必要がある。企業は、適切な場合には、合理的に可能性のある金利の変動の範囲が、最近の金利の変動を反映していることを確保しなければならない。異なるクラスの金融商品に対して別個の感応度分析を提供することが適切な場合がある。

IFRS 第 7 号 40 項(c)で要求されているように、企業が感応度分析の作成に使用する手法および／または仮定を変更する場合（例えば、マクロ経済環境の変化に対応して）、当該変更は変更の理由とともに開示される必要がある。

同様に、ボラティリティの高い市場は、リスクの集中度を高める可能性がある。例えば、その借手が借換リスクにさらされている金融機関の場合である（特に、一部の法域の商業用不動産のようなセクター）。企業は、リスク・エクspoージャーの増加に関して追加情報を開示しなければならないかどうかを検討しなければならない。

流動性リスク

企業の流動性リスクを財務諸表の利用者が理解することに役立つように、IFRS 第 7 号は、金融負債の契約上の満期を表形式で開示することを要求しており、重要なことに、流動性リスクをどのように管理しているかの説明を要求している。IFRS 第 7 号 B11D 項は、満期分析に割引前の契約キャッシュ・フローを反映させ、元本と利息の両方の支払いを含めることを要求している。

企業がサプライヤーに支払うはずだった時期よりも遅い時期に金融機関に支払うオプションを通じて流動性リスクを管理する、サプライヤー・ファイナンス契約によって提供される延長したファイナンスの条件に依存する企業は、当該契約の影響（例えば、契約条件、財務諸表への影響。新たに導入された開示要求についてサプライヤー・ファイナンス契約を参照）が適切に開示されていることを確認しなければならない。実際、金融機関が当該契約を撤回した場合、特に企業がすでに財政難に陥っている場合、企業の負債を決済する能力に悪影響を与える可能性がある。同様の考慮事項は、ファクタリング契約への依存に関しても関連性がある場合がある。

激動の市場環境では、価格の急速かつ大幅な変動により、マージン・コールが発動される可能性が高くなる。関連性がある場合、企業は流動性リスク管理の一環として、当該リスクの影響を説明しなければならない。

また、インフレ率と金利の上昇は、融資契約に含まれる特約条項（covenants）を遵守する企業の能力に影響を与える可能性がある。この場合、企業は、非流動に分類されている負債が報告期間後 12 か月以内に返済すべきものとなる可能性があるというリスクを財務諸表利用者が理解できるようにする情報を開示する IAS 第 1 号 76ZA 項の要求事項を検討しなければならない。

関連する新たに導入される要求事項について、**負債の流動または非流動への分類**も参照。

公正価値測定および開示

現在のマクロ経済状況では、公正価値は不確実性のレベルが高まる可能性があり、また、報告日における公正価値の決定には注意が要求される。

IAS 第 10 号「後発事象」では、修正を要しない後発事象の例として、報告日から財務諸表承認日までの投資の公正価値の下落を挙げている。このような下落は、通常、報告日における投資の状況を反映するのではなく、報告期間後に発生した状況に起因する。そのため、企業は報告日時点において財務諸表で認識されている（または開示されている）金額を調整しないが、この日以後の公正価値の変動について追加の開示が要求される場合がある。市場価格が容

易に確認できる相場のある投資の場合、報告日での公正価値とその価値のその後の変動を区別するのは簡単である。しかし、相場のない投資についてはそうではない可能性があり、公正価値の測定および開示は、報告日時点のマクロ経済状況（不確実性を含む）、および市場参加者が当該投資の価格付けに使用するであろう要因を反映することが重要である。さらに、企業は、以前に使用した方法または仮定を変更することが要求される場合がある。

例えば、これまで比較可能な取引に基づいて投資不動産の公正価値を決定していた企業は、不動産市場の活動が低下しているため、関連性のあるデータが限定されていることに気付く可能性がある。その結果、企業は、比較可能な取引アプローチを使用して見積もった公正価値が、その状況における価値の合理的な範囲内にあることを確認するために、追加の評価方法を適用する必要がある場合がある。使用した評価技法および仮定について、明確で企業固有の情報を提供しなければならない。また、企業は、（評価技法の変更および公正価値ヒエラルキーのレベル間の振替のような）評価測定の重大な変更、および当該変更の理由を説明する、IFRS 第 13 号「公正価値測定」91 項の要求事項を考慮する必要がある。さらに、企業は、還元利回り（capitalisation rate）および／または収益率（rate of return）のようなすべての主要なインプットの開示に注意し、開示が IFRS 第 13 号の開示目的に準拠していることを確認する必要がある。

IFRS 第 13 号の開示要求は、開示目的でのみ実施される公正価値測定にまで拡大することを覚えておくことに価値がある。例えば、IFRS 第 7 号「金融商品：開示」25 項は、償却原価で測定された金融資産および金融負債の公正価値を開示することを企業に要求している（帳簿価額が公正価値の合理的な近似値となっている場合を除く）。IFRS 第 13 号で要求される開示には、公正価値ヒエラルキーのレベル、公正価値ヒエラルキーのレベル 2 および 3 に含まれる金融商品の公正価値測定の評価技法およびインプットの説明が含まれる。上記のように、公正価値測定技法の重大な変更およびその理由を説明しなければならない。さらに、金利が上昇する環境下では、金融商品（特に固定金利の債券）の帳簿価額が公正価値に近似しているという結論は、もはや適切ではない可能性がある。

最後に、IFRS 第 13 号 93 項は、企業が経常的に公正価値で測定される金融資産および金融負債のレベル 3 公正価値測定に関して、追加情報を提供することを要求している。この情報には、観測可能でないインプットの 1 つ以上を合理的に考え得る代替的な仮定を反映するように変更すると公正価値が著しく変化する場合の定量的情報、当該変更の影響、および当該変更の影響をどのように計算したかが含まれる。不確実性の状況では、合理的に考え得る代替的な仮定の範囲は広くなる可能性がある。感応度の開示は、企業の財務諸表の利用者に意味のある情報を提供するために、十分に詳細でなければならぬ。

IFRS 第 15 号「顧客との契約から生じる収益」

関税は財を輸入する購入者に課せられるコストであるが、IFRS 第 15 号の適用にあたり、企業（売手）が顧客との契約をどのように会計処理するかについて多くの経路で影響を与える可能性がある。

関税の直接的および間接的な影響の結果として、企業は、一定の期間にわたり充足される履行義務を履行する際に、より高いコストを負担することが見込まれる場合がある。企業が現在までに生じたコストを、履行義務の完全な充足に向けての進捗度を測定するためのインプット法として使用している場合、状況の変化に応じて進捗度の測定値を更新しなければならない。報告日時点で完成までのコストを見積もる際には、企業は関税の予想される影響（例えば、予想される新しい関税、既存の関税の引上げまたは引下げ、またはそれらの一時的な停止。報告日後の新しい関税または既存の関税の変更の発表の影響についての解説は、後発事象を参照いただきたい。）を考慮に入れなければならない。完成までの見積りコストが増加することにより、完成率および認識した収益の累積額の両方が減少する可能性があり、これは見積りの変更として会計処理し、重要性がある場合、IAS 第 8 号「会計方針、会計上の見積りの変更及び誤謬」の 39 項を適用して開示する。

顧客との契約の中には、コストの増加（例えば、関税の引上げの結果として）が顧客への価格設定に自動的に反映する価格調整条項が含まれている場合がある。このような価格調整条項は、IFRS 第 15 号に記載されているように、変動対価として会計処理される。しかし、契約にコストの変動に対応するメカニズムが含まれていない場合、顧客が支払うべき価格の潜在的な上昇の影響は、契約が変更されるまで取引価格に反映されず、契約が変更された時点での影響を契約変更として会計処理しなければならない。

売上税とは異なり、価格調整を通じて顧客に転嫁される仕入先に課せられる関税（既存の契約条件またはその再交渉の結果にかかわらず）は、第三者のために回収する金額を構成しないため、そのような調整は（事実と状況に基づき、変動対価または契約変更のいずれかとして）取引価格に反映しなければならない。

現在のマクロ経済の不確実性は、契約に基づいて支払うべき金額を支払う顧客の能力に影響を与える可能性がある。その結果、予想信用損失が影響を受ける可能性があり、企業は、顧客が支払いができない可能性が、顧客との契約が収益を認識するための IFRS 第 15 号の条件を満たしているという結論に影

響を与える可能性があるかどうかを検討する必要があるかもしれない。このようなシナリオでは、状況に適切な変化が生じるまで、さらなる収益認識が妨げられる場合がある。また、企業は、契約の再交渉、譲歩の付与（例えば、輸入者である顧客と関税の負担を分担する）、または契約の取消しを行う場合があり、これにより、企業は契約変更または価格譲歩に関する IFRS 第 15 号の要求事項を検討することが要求される。

該当する場合、企業は、顧客との契約から生じる収益の会計処理（例えば、契約変更の会計処理を評価する際）において行われた重大な判断およびこれらの判断の変更、重大な見積り（例えば、変動対価に関連して）を開示し、これらの財務諸表への影響を説明しなければならない。さらに、企業は、地政学的またはその他の不確実性により、収益の分解に関する開示を変更することが要求されるかどうかを検討する必要がある可能性がある。

最後に、契約に損失が予想される場合、企業は、IAS 第 37 号「引当金、偶発負債及び偶発資産」に従って、不利な契約の引当金を認識すべきかどうかを評価する必要がある。

不利な契約の引当金

世界貿易の変化により、契約による義務を履行するための不可避的なコストが、受け取ると見込まれる便益を上回り、その結果不利な契約となる可能性がある。IAS 第 37 号は、不利な契約に関する引当金の認識を要求している。

報告日に締結されている契約で、不利な契約の引当金が必要となる可能性のあるものの例には、以下のようなものが含まれる。

- 関税の対象となる輸入品の購入契約
 - 仕入先が負担するコストが増加した場合の自動価格調整を含む購入契約
 - 収益契約（例えば、契約を履行するために必要なコストが関税の対象となる場合）
- 不利な契約に対して認識される引当金は、契約から解放されるための最小の正味コスト、すなわち、以下のうちいずれか低い方を反映しなければならない。
- 契約履行のコスト
 - 契約不履行により発生する補償または違約金

契約から解放されるための最小の正味コストを決定する際に、企業は、特定の特別な状況で違約金が生じることなく契約を終了することを認める契約条件（「不可抗力条項」）に注意を払わなければならない。輸入者が負担する関税が変更されたときに制定できるような不可抗力条項が契約に含まれている場合、企業はさらなる義務を回避できるため、契約は不利ではない可能性がある。

IAS 第 37 号は、「その法律がほぼ確実に制定されるという十分な客観的証拠が存在する場合には、新しい法律の可能性の影響が「既存の義務の測定の際に考慮に入れる。」ことを要求している。本基準は、「多くの場合、十分に客観的な証拠は、新しい法律が制定されるまでは存在しない。」ことに留意している。したがって、企業は通常、報告日に制定されている関税に基づいて、契約が不利であるかどうかを評価し、契約が不利である場合には、不利な契約の引当金を測定しなければならない。不利な契約の引当金の評価および測定に使用する他のインプットが見込まれる金額（例えば、契約に基づき「受け取ると見込まれる便益」が、販売価格または量の見込まれる変更をどの程度反映しているか）をどの程度反映すべきかを評価するには、判断が要求される。

リストラクチャリング引当金

経済の不確実性に直面している企業は、さまざまな形態のリストラクチャリング（事業の売却、事業の閉鎖または移転など）に関与することがあるかもしれない。IAS 第 37 号は、厳格な規準を満たす場合、かつその場合にのみ、リストラクチャリングのコストの引当金を要求している。

金融商品

予想信用損失

IFRS 第 9 号を適用して、予想信用損失（ECL）は、営業債権、負債性金融商品、リース債権、契約資産、引受ローン・コミットメントおよび金融保証から生じるキャッシュ不足の現在の確率加重計算を反映している。ECL の見積りでは、現在の経済環境が借手の返済能力に与える影響、特にインフレ、金利上昇、新しい関税または関税の引き上げ、企業の収益性の低下および家計所得の減少から生じる影響を考慮しなければならない。信用スプレッドの全般的な拡

大は、エクスポージャーが 12 か月 ECL から全期間 ECL に移行する可能性を高めることにつながる。これは、現在の不確実性のあるマクロ経済環境および地政学的環境が、エクspoージャーが最初に認識された時点の信用リスクと比較して、信用リスクの著しい増大を招いた可能性があるという事実を反映している。これは、特定のセクターおよび地域へのエクspoージャーが、インフレ率および金利および外国為替レートが他のセクターに比べて不均衡な負担を強いられることを反映して、より集中する可能性がある。

報告日後の新しい関税または既存の関税の変更の発表の影響についての解説は、[後発事象](#)も参照いただきたい。

ヘッジ会計

取引がキャッシュ・フロー・ヘッジ関係のヘッジ対象として指定されている場合、企業は、その取引がいまだ「可能性の非常に高い予定取引」であるかどうか、そうでない場合は、いまだ発生することが見込まれるかどうかを検討する必要がある。そのため、現在の経済環境は、ヘッジ会計を適用する企業の能力に影響を与える場合がある。例えば、金利上昇の結果として発生することがもはや見込まれない将来の債務の発行をヘッジするために金利スワップを使用する場合がある。

企業が、予定取引の可能性がもはや非常に高くはないが、発生がまだ見込まれると判定する場合、企業は、将来に向かってヘッジ会計を中止しなければならない。その他の包括利益にこれまで認識された利得または損失は、予定取引が発生するまでキャッシュ・フロー・ヘッジ剰余金に留保される。予定取引の発生がもはや見込まれない場合には、企業は、ヘッジ手段に関してキャッシュ・フロー・ヘッジ準備金で認識された利得または損失の累計額を直ちに純損益に振り替えなければならない。

さらに、信用リスクの増大により、ヘッジ手段とヘッジ対象の間の経済的関係から生じる価値変動に信用リスクの影響が著しく優越する場合、ヘッジ関係が、ヘッジ有効性の評価を満たさなくなる可能性がある。そのため、企業は、例えば、現在の環境を理由に相手方のデフォルト・リスクが高まることが、ヘッジ会計の中止につながるかどうかを評価する必要がある。

関連性がある場合、企業は、報告期間中および報告期間の末日のヘッジ関係の有効性に関する詳細な開示、および中止したヘッジ関係に関する情報を提供することを検討する必要がある。

財務諸表における気候関連リスク

しばらくの間、規制当局は、企業が直面する主要なリスクと不確実性の説明とともに、企業の事業の業績および財政状態の進展、バランスのとれた包括的な分析を提供する際に、気候関連事項とその影響に特に注意を払うよう企業に求めてきた。

財務諸表の情報と年次報告書の他の場所で提供される情報との間のつながり（connectivity）を達成することで、企業は財務業績および財政状態の包括的かつ統合された見通しを提供することができる。気候関連事項の文脈では、つながりは、財務諸表の利用者が気候変動から生じる企業のリスクと機会をよりよく理解するのに役立つ。また、企業がグリーンウォッシングと認識されるリスクを低減することにも役立つ。

欧州証券市場監督局(ESMA)は 2023 年 10 月に「[The Heat is On: Disclosures of Climate-Related Matters in the Financial Statements](#)」と題するレポートを公表した。このレポートでは、年次財務報告書の中でつながりを識別するために使用される 4 つのハイレベルの原則を解説している。

1. 一貫性（Consistency and coherence）：仮定が、年次財務報告書の異なる構成要素の中で、また構成要素間で一貫しているように見えるか？
2. 補完性：年次財務報告書の非財務セクションに含まれる情報と財務諸表の間に補完性があるか？
3. 相互参照：年次財務報告書の異なる構成要素内および構成要素間のリンクはあるか？
4. 繰返しの回避：情報は具体的で財務諸表の理解に有用であるか、それとも単に年次財務報告書の非財務セクションの内容を繰り返すだけであるか？

また、ESMA のレポートは、企業が財務諸表における気候関連事項に関して、より関連性があり透明性の高い情報をどのように提供するかについて、執行機関の見解を示している。特に、本レポートでは、ESMA の一般的な執行優先事項と一貫する気候関連開示の例を提供している。本レポートは欧州の発行企業を対象としているが、取り扱っているテーマは他の法域の企業にも関心を寄せている。

情報の一貫性

企業は、年次報告書の他の箇所で気候関連事項に重点が置かれている程度が、財務諸表に適用された判断および見積りに気候関連事項がどのように反映されているかと一貫しているかどうかを検討しなければならない。財務報告の目的で使用される予測は、報告日における企業の戦略計画および計画された行動を反映し、報告日における最良の見積りに基づかなければならぬ（例えば、短期または中期の行動が、年次報告書に反映されている記載された長期的な脱炭素化コミットメントを達成するために必要な場合）。特に、温室効果ガスの排出削減および脱炭素化計画のような、気候関連コミットメントおよび目標に焦点を当てなければならない。関連性がある場合、企業は財務諸表において、計画された投資および移行計画の時期および財務上の影響を開示しなければならぬ。企業の気候関連計画の議論に短期的なコミットメントと長期的な計画および願望の両方が含まれる場合、これらを互いに区別し、どの確定コミットメントを企業の予算および会計上の仮定に組み込むかを明確にすることが重要である。

気候関連事項に重要性がある場合、IFRS 会計基準が当該事項に明示的に言及していないても、財務諸表の作成において考慮されることが期待される。投資家または規制当局は¹、気候関連事項が、財務諸表にどのように影響するか、どの程度影響するか（または影響しないか）についての説明なしに、（例えば、減損テストで）検討されたことを記述する定型的な開示（boilerplate disclosures）に満足すると仮定することはできない。例えば、投資家は、財務報告に使用される企業の予測がパリ協定の目標と一致しているかどうかを理解することを望んでいる。²異なる気候変動の軌道の下で可能性のあるシナリオおよび可能な結果の範囲は複数ある。企業は、使用する仮定を明確にし、感応度分析をより有効に使用することが重要である。

該当する場合、企業は、（感応度分析を含む）減損テストまたは認識された引当金において使用した仮定と、気候関連のコミットメント、計画および／または戦略との間のズレを説明しなければならない。例えば、このようなずれは、企業の気候関連コミットメントが、IAS 第 37 号を適用して推定的義務を生じさせず、関連する引当金が認識されていない場合に生じる可能性がある。

非金融資産の減損

気候関連リスク（物理的リスクまたは移行リスク）に対するエクスポージャーは、減損の兆候である可能性があるまたは資産または資産グループの回収可能価額を算定する際に使用する見積キャッシュ・フローに影響を与える可能性がある。気候関連リスクが予測キャッシュ・フローまたは割引率に与える影響は、IAS 第 36 号に基づく開示が要求される重要な仮定となる可能性があるが、その場合、主要な仮定およびその予測が企業の将来のキャッシュ・フローに与える影響についての説明を提供しなければならない。

例えば、減損テストの実施に用いるインプットが気候関連事項と関連し、重要な仮定として識別された場合、企業は、使用した定量化された仮定の開示（例えば、アウトプットの価格設定を通じて炭素コストを回収する企業の予想される能力、または特定の資産の置換えの時期および金額を含むカーボン・プライシング）、およびそのような定量化の基礎または情報源（外部証拠に、より大きくウェイト付けしなければならないことに留意する）、関連性がある場合には、感応度分析を考慮しなければならない。

同様に、気候関連事項が、資産の回収可能価額の見積りに用いた事業計画の仮定、事業計画を超えて考慮した期間および（割引率および成長率のようない）使用した財務上の仮定に影響を与える場合にも開示が要求される場合がある。

さらに、IAS 第 36 号は、CGU の使用価値が CGU の資産から生じると見込まれる便益の現在のレベルを維持するために必要なキャッシュ・アウトフローを含めるが、資産の拡張に関連するキャッシュ・アウトフローは除外することを要求している。場合によっては、この 2 つを区別することは（例えば、脱炭素化計画の一環として）容易ではなく、開示すべき重要な仮定を表す場合がある。

財務諸表の他の分野

また企業は、気候関連事項が財務諸表に与える影響を評価する際に、以下の特定のトピックを考慮する必要がある場合がある。

¹ 例えば、2023 年 3 月に ESMA によって公表された [最近の報告「第 27 回_EECS の施行データベースからの抜粋」](#)（項目 VII および VIII）を参照

² デロイトの [A Closer Look「気候変動に関するパリ協定に沿ったコーポレート・レポーティングに対する投資家の需要」](#)が、より詳細に解説している。

- 企業が、気候関連事項が事業および／または資産および負債の測定に重要性がある財務上の影響を与えるとは見込まれないと結論付けた場合、規制当局は、特にエクスポート・セクターで事業を行っている場合、実施した評価、行った判断およびそのような結論に達するために使用した期間を開示することを期待している。当該開示は、企業の具体的な状況に合わせて調整しなければならない。
- 法的に要求されるまたは任意で炭素排出量を相殺することを決定した企業は、その結果としての財務業績、財政状態およびキャッシュ・フローに与える影響について、関連する財務諸表の表示科目を含む、適切な開示が行われることを確認しなければならない。これには、例えば、関連する財務諸表項目（例えば、温室効果ガス（GHG）排出枠またはカーボン・オフセットの資産および／または排出量引当金）の認識、測定および表示に使用する会計方針、企業が参加するスキームの主要な条件と性質（スキームが強制かまたは任意かを含む）、および取得した、所有する、負っている、消費したまたは売却した炭素排出枠または再生可能エネルギー証書の数量が含まれる。

2024年10月、ESMAは、カーボン・プライシング・プログラムに関する財務諸表の考慮事項に関する企業の意識を高めることを目的とした公表文書「[Clearing the Smog: 財務諸表における炭素排出枠](#)」を公表した。

本文書は、企業が参加した、または参加する予定のカーボン・プライシング・プログラムの契約上の特徴、および企業（そのインダストリーまたはセクター）が従う可能性のあるその他の要求事項または規制を慎重に分析するよう企業に促している。契約上の特徴および商品が異なることにより、会計処理も異なる場合がある。検討すべき論点には以下が含まれる。

- カーボン・プライシング・プログラムは、IFRS会計基準における資産の定義を満たす権利を生じさせるか？その場合、資産の性質、認識の時期および測定はどうか？
- 企業は炭素排出枠を取得する義務を有するか？その場合、負債はいつ認識しなければならず、どのように測定しなければならないか？
- カーボン・プライシング・プログラムが生み出す収益または費用の項目の性質は何か、また、これらの金額はどの時点で認識しなければならないか？
- カーボン・プライシング・プログラムに関連するキャッシュ・フローは、キャッシュ・フロー計算書においてどのように分類しなければならないか？
- 財務情報の利用者がカーボン・プライシング・プログラムの影響を理解するためには、どのような開示が必要か？

- グリーン・ファイナンス（例えば、ESGインデックス・ローンの発行）を行う金融機関は、財務諸表の利用者が影響を理解し、これらの金融商品に関連する特定のリスクの性質および程度を評価するために必要な情報の開示を検討する必要がある（例えば、金融商品の主要な特性、帳簿価額、満期、環境規準、それらの金融商品に関連する特定のリスク、キャッシュ・フローへの影響および感応度、およびこれらのリスクをどのように管理しているか）。また、企業の会計方針の適用に重大な判断が伴う場合、例えば、ESG連動金融資産の契約上のキャッシュ・フローが元本および／または元本残高に対する利息の支払であるかどうかを評価する場合にも、開示が要求される場合がある。

IFRS第9号およびIFRS第7号の最近の修正（以下の[主な新たな会計上の要求事項](#)も参照）により、金融資産の契約上のキャッシュ・フローが基本的な融資の取決めと整合的であるかどうかを企業がどのように評価するかに関する要求事項が変更された。これは、ESGにリンクする要素を有する金融資産にこれらの要求事項を適用することを支援することを目的としており、そのような金融商品が償却原価で測定される可能性が高まる。

本修正は、2026年1月1日以後開始する事業年度に発効するが、企業は、それ以前の期間にすべての修正または金融資産の分類に関連する修正のみを早期適用することが認められる。

デロイトの[A Closer Look「気候変動に関するパリ協定に沿ったコーポレート・レポーティングに対する投資家の需要」](#)は、気候に関する投資家の期待の背景と、どの要求事項がIFRS財団の公表物である[In Brief : IFRS基準と気候関連の開示](#)および[IASBの教育的資料「気候関連事項が財務諸表に与える影響」](#)によって強調されているか、およびそれらの要求を実務においてどのように適用する可能性があるかについて提供している。さらに、

- 2024 年 4 月、IFRS 解釈指針委員会は、財務諸表における気候関連コミットメントの影響を評価するために実施すべき分析を説明するアジェンダ決定を公表した。
- 2024 年 7 月、IASB は、公開草案「財務諸表における気候関連及びその他の不確実性—設例案」を公表し、企業が財務諸表において気候関連およびその他の不確実性の影響を報告するために、IFRS 会計基準の要求事項をどのように適用するかを例示する設例を IFRS 会計基準に追加することを提案している。設例案は大半が気候関連の不確実性に焦点を当てているが、示されている原則および要求事項は他の種類の不確実性にも同様に適用される。ほぼ確定版のスタッフ草案（near-final staff draft）が 2025 年 7 月に公表された。[iGAAP in Focus 財務報告「IASB は、財務諸表における気候関連およびその他の不確実性についての設例案を提案」](#)は、設例案を解説している。

サステナビリティ報告の動向

国際サステナビリティ基準審議会（ISSB）

ISSB の目的は、資本市場のサステナビリティ情報ニーズを満たす高品質なサステナビリティ開示基準を開発することである。

現在までに、ISSB は、最初の 2 つの基準を公表している。IFRS S1 号「サステナビリティ関連財務情報の開示に関する全般的 requirement」および IFRS S2 号「気候関連開示」である。

- IFRS S1 号は、一般目的財務報告の主要な利用者が企業に資源を提供することに関連する決定を行う際に有用である、サステナビリティ関連のリスクおよび機会に関する情報を企業が開示するための全般的な要求事項を示している。
- IFRS S2 号は、一般目的財務報告の主要な利用者が企業に資源を提供することに関連する決定を行う際に有用である、気候関連リスクおよび機会に関する情報を識別、測定および開示するための要求事項を示している。

両基準は、2024 年 1 月 1 日以後開始する事業年度に発効し、作成者にサステナビリティ関連財務開示と財務諸表を合わせるためのさらなる期間を認める実質的な移行の救済措置がある。基準は 2024 年 1 月 1 日に発効するが、法域が基準をアドプションしたときにのみ強制適用されることになる。30 を超える法域が、法的または規制上のフレームワークにおいて、IFRS サステナビリティ開示基準を使用することをすでに決定したまたは導入する段階である。これらの法域は、GDP ベースで、グローバル経済の半分超を示している。デロイトの[「法域ごとの IFRS サステナビリティ開示基準のアドプション」](#)は、ISSB 基準をアドプションしたまたはアドプションする過程にある法域の概要を提供している。

デロイトの[iGAAP in Focus サステナビリティ報告「ISSB が、最初の IFRS サステナビリティ開示基準を公表」](#)は、IFRS S1 号および IFRS S2 号の主要な要求事項を解説している。さらに、IFRS S1 号および IFRS S2 号を適用する企業を支援するために利用可能である、ISSB スタッフによって開発された権威のない[教育的資料](#)がある。

2 つの基準の公表後に、

- 2025 年 4 月、ISSB は公開草案「温室効果ガス排出の開示に対する修正」を公表し、追加的な救済措置を提供し、特定の GHG 排出の開示要求からの既存の救済措置を明確にする、IFRS S2 号の的を絞った修正を提案した。コメント期間は 2025 年 6 月 27 日に終了した。デロイトの[iGAAP in Focus サステナビリティ報告「ISSB が特定の温室効果ガス排出の開示要求に対する IFRS S2 号の改訂を提案」](#)は、本提案のより詳細を解説している。
- 2025 年 7 月、ISSB はさらに 2 つの公開草案を公表した。
 - 「SASB スタンダード」の修正案 – ISSB が包括的な見直しのために優先した 9 つの「SASB スタンダード」の修正を提案し、適切である場合には、産業にわたって共通トピックに関する開示の整合性を維持するために、他の SASB スタンダードの対応する指標を整合させる。
 - IFRS S2 の実施に関する産業別ガイダンスの修正案 – SASB スタンダードとの整合性を維持するためのガイダンスの修正を提案している。

ED のコメント期間は 2025 年 11 月 30 日に終了する。デロイトの iGAAP in Focus「[ISSB が、SASB スタンダードの向上と、IFRS S2 号の結果的修正を提案](#)」は、提案の詳細を解説している。

重大な域外への広がりを有する法域の動向

欧州連合の企業サステナビリティ報告指令 (CSRD) および欧州サステナビリティ報告基準 (ESRS)

2025年2月26日、欧州委員会（EC）は、CSRD、EU タクソミ規則、企業サステナビリティ・デューデリジェンス指令（CSDDD）によって課せられるサステナビリティおよびデューデリジェンス報告の負担を大幅に軽減することを目的としたいくつかの法案（いわゆる「オムニバス・パッケージ」）を公表した。主要な変更には以下が含まれる。

- CSRD の適用：従業員数が 1,000 人超、正味の売上高が 5,000 万ユーロ超または貸借対照表の合計が 2,500 万ユーロ超の企業に限定される。
- 報告の期限：企業の Wave 2（Wave 1 に含まれない大企業）の CSRD の発効日を 2025 年から 2027 年に、Wave3（上場中小企業、小規模で複雑でない信用機関、キャプティブ保険および再保険企業）の CSRD の発効日を 2026 年から 2028 年に延期する。
- CSDDD の延期：CSDDD の国内法制化および大企業への適用を 1 年延期する。

CSRD の報告期限および CSDDD の国内法制化と適用の変更は、欧州議会および EU 理事会で承認され、2025 年 4 月 16 日に EU 官報に掲載されて発効した。

加盟国は、2025 年の報告期間間に間に合うように発効させるため、2025 年 12 月 31 日までに法制化することが期待されている。

さらに、2025 年 3 月 27 日、EC は ESRS を簡素化するために、2025 年 10 月 31 日までに EFRAG サステナビリティ報告審議会にテクニカルなアドバイスを要請した。本改訂の目的は、以下のとおりである。

- 必須の ESRS データポイントの数を大幅に削減する。
- 不明瞭とみなされる規定を明確にする。
- 重要性の原則の適用方法をさらに明確にする。
- 基準の構成と表示を簡素化する。
- グローバルなサステナビリティ報告基準との相互運用性を向上させる。ESRS を最初に適用した企業の経験により得られた考慮事項を反映する。
- ESRS を最初に適用した企業の経験により得られた考慮事項を反映する。

2025 年 7 月、EFRAG はこれらの改訂案の公開草案を公表し、現在、EC に技術的アドバイスを提出する前に、それについて受け取ったフィードバックを検討している。EC は改訂 ESRS を委任法として採択する予定であり、改訂 ESRS は 2027 事業年度に適用され、2026 年に任意適用される可能性がある。

詳細については、[iGAAP in Focus 欧州サステナビリティ報告「欧州委員会は、サステナビリティ報告とデューデリジェンスに関する開示要件について大幅な軽減を提案」](#)（オムニバス提案が発表されてからの進展を反映するために [2025 年 9 月 30 日に英語版を更新](#)）を参照いただきたい。

以下の内容は、2022 年 12 月に EU 官報に掲載された CSRD を反映したもので、オムニバス・パッケージで提案されている修正案は考慮されていない。オムニバス・パッケージの提案が確定した時点で、内容を更新する予定である。

CSRD は、投資家、市民社会、その他の利害関係者向けの企業のマネジメント・レポートのサステナビリティ報告を改善し、それによって欧州グリーンディールおよび国連の持続可能な開発目標（SDGs）に沿った完全に持続可能で包括的な経済および金融システムへの移行に貢献することを目的としている。

CSRD の対象となる企業範囲は広く、限定的な例外はあるものの、EU の規制市場に証券を上場している（非 EU 企業を含む）企業が含まれる。その範囲は、（非 EU の親会社の EU 子会社を含む）特定の非上場の EU 企業にも拡大している。

ESRS の最初のセットには、以下が含まれる。

- 以下を取り扱う 2 つの横断的基準：

–サステナビリティ関連情報を作成および表示する際に企業が準拠すべき全般的な要求事項（ESRS 1）。これには、ダブル・マテリアリティの原則を使用して報告する重要性の評価を実施する要求事項が含まれる。

-活動のセクターに関係なく（すなわち、セクター共通）、サステナビリティのトピック横断的に、すべての企業に適用される全般的開示（ESRS 2）

- セクター共通の観点から環境、社会およびガバナンスのトピックをカバーする 10 のトピック別基準

CSRD は、異なる種類の企業について、ESRS に従った強制開示の発効日を指定している。企業の最初のウェーブは、2024 年 1 月 1 日以後開始する期間に ESRS を適用することが要求された。

これらの要求事項を適用する企業にとって、次の文書が利用可能である。

- 2024 年 11 月、EC は、[90 のよくある質問（FAQ）](#) のセットを官報（official journal）に公表した。FAQ は、ESRS、EU タクソノミ規則開示、デジタル・フォーマットの要求事項、保証、サステナブル・ファイナンス開示規則に関する多くの FAQ とともに、CSRD に基づく特定のサステナビリティ報告の要求事項の解釈を明確にしている。
- 2024 年 5 月、EFRAG は、[EFRAG IG 1 号「重要性評価」](#)、[EFRAG IG 2 号「バリューチェーン」](#)、[EGRAG IG 3 号「詳細な ESRS データポイント」](#) および付属する[説明文書](#)の 3 つの ESRS 適用ガイダンス文書を公表した。

さらに、EFRAG は、EFRAG ESRS Q&A プラットフォームを通じて受け取ったテクニカルな ESRS の質問を含む[説明文書の編集物](#)を公表した。これら EFRAG の文書には権威がない。

2025 年の ESMA の共通の執行優先事項には、改訂された ESRS（上記参照）は EU 官報に掲載された後にのみ適用されること、したがって、企業は 2025 年の事業年度の開示を作成するために、EFRAG の公開草案または EC への最終的な技術的アドバイスに頼るべきではないことをリマインドすることが含まれている。

さらに、ESMA は、サステナビリティ・ステートメントに関する 2025 年の優先事項として、以下の項目を識別している。

ESRS に基づく報告におけるマテリアリティの検討に関して、ESMA は、

- 企業は、ESRS 2 のマテリアリティ評価プロセスに関する開示に特に注意を払い、ボイラープレートな開示を避け、ESRS の要求事項を企業の事実と状況にどのように適用したかについて十分な洞察を提供する必要があることを強調する。
- マテリアリティ評価プロセスへの入力パラメータに関するデータポイント、閾値の開示（特に、そのマテリアリティについて、企業が評価プロセス中に最も不確実性があった事項について）、企業がグロスの影響をどのように考慮したか（すなわち、予防、緩和、または是正措置の効果が現れる前）、および影響を受けるステークホルダーとのエンゲージメントに関する情報を強調する。
- 評価プロセスの結果に関する ESRS 2 の開示の重要さを強調し、IRO の説明に関する要求事項および推奨事項（例えば、関連する期間、IRO が企業自身の事業で発生するまたはバリューチェーンで発生するか、重要性がある IRO 間の相互依存性の説明、プラスの影響とマイナスの影響の軽減の区別の促進）、および IRO とトピックの開示とのつながり（connection）（例えば、IRO を ESRS のトピックおよびサブトピックにマッピングし、IRO の説明における ESRS 用語の使用を通じて）を強調し、および優れた実務として、ステートメント内で簡単に識別できるように、企業固有の開示を体系的に示すことを奨励する。
- ESRS が認めている場合、重要性がない情報は明確に識別され、重要性がある情報を不明瞭にするべきではないことを企業にリマインドする。

サステナビリティ・ステートメントの範囲および構成に関して、ESMA は、

- サステナビリティ・ステートメントは、財務諸表と同じ報告企業のものでなければならないことをリマインドする。
- サステナビリティ・ステートメントで提供される情報は、企業のバリューチェーンにつながりがある（connected）重要性がある IRO に関する情報を含むように拡張されていることに留意し、バリューチェーン内の企業に関する範囲限定の開示の考慮事項についてリマインダーを提供する。
- 内部の相互参照および参照による組込みを使用する意向である企業は、読みやすさおよび明確性の全体的な目的を損なう情報の分散を生じさせないことを提言する。

- 関連する情報を開示する際にサステナビリティ・ステートメントのアクセス可能性および読みやすさを高めるために、開示要求への参照を含めるという実際上の解決策に留意し、内部参照を容易にするためにハイパーリンクの使用を奨励する。
- 金額またはその他の定量的情報がサステナビリティ・ステートメントと財務諸表の両方に含まれている場合、ESRS 第 1 号 124 項は前者から後者への参照を要求することをリマインドする。

以下のデロイトのニュースレターは、さらなる情報を提供している。

- [iGAAP in Focus 欧州サステナビリティ報告「欧州サステナビリティ報告基準（ESRS）の最終化」](#)は、ESRS の 1st セットを解説している。
- [iGAAP in Focus「EU タクソノミー企業報告の要求事項」](#)は、EU タクソノミ規則の要求事項を解説している。
- [iGAAP in Focus「企業サステナビリティ報告指令（CSRD）に基づく『適正な表示』」](#)は、CSRD の下での「適切な表示」に関する考慮事項およびサステナビリティ報告書の作成に対する影響について解説している。

相互運用可能性のガイド

2024 年 5 月、IFRS 財団と EFRAG は、IFRS サステナビリティ開示基準と ESRS の両方を適用する企業を支援する [相互運用可能性のガイド](#) を公表した。このガイドでは、2 つの基準間の整合（alignment）の概要を示す。ESRS におけるファイナンシャル・マテリアリティの定義は、IFRS サステナビリティ開示基準における重要性の定義と整合しており、共通に定義されている用語が多数あり、気候に関する IFRS サステナビリティ開示基準の開示のほとんどすべてが ESRS に含まれていることを指摘している。

しかし、これは、企業が 1 つの基準を適用することで、自動的に他の基準への準拠を主張できることを意味するものではない。両基準と一緒に適用する場合は、それぞれの基準の目的および要求事項を考慮するよう注意する必要がある。例えば、それぞの基準、特に ESRS で規定されている追加の気候関連開示要求で識別していることを確認する必要がある。さらに、ESRS は、一般目的財務報告書の利用者よりも幅広い関係者の情報ニーズを満たすことを意図していることに留意する必要がある（ダブル・マテリアリティの原則を適用していることを前提として）。

相互運用性ガイドは、関連性がある基準と併せて読まなければならない。企業は、IFRS サステナビリティ開示基準または ESRS の要求事項を満たすために、当該ガイドに単独で依拠することはできない。

米国

証券取引委員会（SEC）

2025 年 3 月 27 日、SEC は、2024 年 3 月の気候関連情報開示の最終規則に法的に異議を申し立てた当事者に対する法律上の抗弁を取り消すことを決議した。規則は、登録企業に対し、年次報告書および登録届出書において気候関連の開示を要求することになっていた。以前、SEC は、最終規則に異議申立の司法審査が行われるまでの間、最終規則の発効日を延期（一時停止）した。

2025 年 9 月 12 日、裁判所は訴訟を一時停止する命令を出し、「最終規則を取り消し、廃止し、修正し、訴訟で弁護するかどうかを決定するのは SEC の責任である」と述べている。訴訟がどのように進行するか、または SEC が規則を修正または廃止するかどうかは不明である。しかし、現職の SEC 委員長が 2022 年に最終規則の合法性に疑問を呈する意見記事を共同執筆し、また他の 3 名の現職 SEC 委員のうち 2 名が最終規則の公表に反対票を投じたことを踏まえると、裁判所がそれを支持するまたは訴訟が取り下げられる場合であっても、最終規則が現在の形で継続する可能性は低い。

カリフォルニア

2023 年 10 月、カリフォルニア州知事は、カリフォルニア州で事業を行う特定の米国の公開および非公開企業が定量的および定性的の双方の気候関連の開示を提供することを、一括して要求する 3 つの法案に署名した。

法案 SB-253「気候関連企業データ説明責任法（Climate Corporate Data Accountability Act）」および SB-261「温室効果ガス：気候関連の財務リスク（Greenhouse Gases: Climate-Related Financial Risk）」は、米国において温室効果ガス排出および気候変動リスクの企業報告を義務付ける、最初のインダストリー共通の米国の規則を定める。

さらに、カリフォルニア州議会法案である AB-1305「自主的な炭素市場開示（Voluntary Carbon Market Disclosures）」は、気候関連の排出権のグリーンウォッシングに対抗することを目的としており、カリフォルニア州内で自主的なカーボン・オフセット（VCO）を市場売却または売却する米国および国際的な企業、およびカリフォルニア州で事業を行い、カリフォルニア州で特定の気候関連排出権を行う企業（VCO を購入または使用しているかどうかにかかわらず）に対する要求を定める。

SB-219「温室効果ガス：気候に関する企業の説明責任：気候関連の財務リスク」は、2024年9月に署名され、SB-253 の準拠に伴う財務上の負担を軽減することに役立てるために、以下のことを認めている。

- 企業が、連結親会社レベルでの排出量開示報告書を提出する。
- カリフォルニア州大気資源局（CARB）は、スコープ3のGHG 排出量報告のスケジュールを設定する。

SB-253 では、企業は 2025 年の GHG 排出量データに基づいて、2026 年からスコープ 1 およびスコープ 2 の GHG 排出量を報告することになる。CARB は、この報告の期限を 2026 年 6 月 30 日と提案している。企業は、2026 年の GHG 排出量データに基づいて、2027 年にスコープ 3 の GHG 排出量の報告を開始する。

CARB は、SB-253 が要求する報告に関する規則を公表することが要求されている。2025 年 7 月 1 日までに SB-219 によって修正された SB-253 には、2025 年 7 月 1 日の期限が含まれているが、規制の実施について、CARB のスタッフは、2026 年第 1 四半期までに規制の開発に向けて取り組むことを提案した。しかし、州法では、規制が提案されてから最終決定するまでに最長 1 年が設定されている。

SB-261 では、企業は 2026 年 1 月 1 日以前に、その後は隔年で、気候関連の財務リスク報告書をウェブサイトに掲載しなければならない。CARB のチェックリストのドラフトは、企業がこれらの要求事項を遵守するのを支援するために 2025 年 9 月に提供された。

SB-253 および SB-261 に対する異議申立ては続いている。2024 年 1 月に提訴した「Chamber of Commerce of the United States of America v. California Air Resource Board」の原告は、SB-253 と SB-261 が「気候変動に関する言論を違法に規制しようとしている」と主張し、これらの法案は憲法修正第 1 条およびその他の連邦法に違反していると主張している。彼らは、カリフォルニア州中央地区連邦地方裁判所に対し、SB-253 および SB-261 を無効と宣言し、いかなる強制力も効力もないと宣言するよう求めている。しかし、SB-253 および SB-261 は、そのような異議申立てが解決されるまで引き続き有効である。

[iGAAP in Focus サステナビリティ報告「カリフォルニア州の気候法 – 新しい州議会法案での報告期限に変更なし」](#)は、州議会法案の内容を説明している。

温室効果ガスプロトコル

温室効果ガスプロトコル（GHG プロトコル）は、温室効果ガス（GHG）排出を測定および報告するための受入可能でグローバルなフレームワークを開発することを目的とする、GHG 排出についてのコーポレート・レポーティングのフレームワークの測定および開示に関するガイドanceを提供する。多くのサステナビリティ報告基準設定主体は、サステナビリティ報告基準で要求する開示に関して、GHG プロトコルの要求事項を参照している（例えば、IFRS サステナビリティ開示基準および ESRS）。

2025 年 10 月、GHG プロトコルは、「スコープ 2 ガイダンス」の更新案に関する公開協議を開始した。本協議の焦点は、帰属的（attributional）バリューチェーンの枠組み内でのロケーション基準手法およびマーケット基準手法についてである。

同時に、GHG プロトコルは、企業のインベントリ以外の排出の影響を報告する要求を開発するアクションおよびマーケット手段専門作業部会（Actions and Market Instrument Technical Working Group）に情報を提供するために、電力セクターの帰結的手法について協議している。

協議期間は 2025 年 12 月 19 日に終了する。[iGAAP in Focus サステナビリティ報告「GHG プロトコルが『スコープ 2 ガイダンス』修正案の協議を開始」](#)は、本提案の詳細を解説している。

気候関連財務情報開示タスクフォース（TCFD）

IFRS S1 号および IFRS S2 号の公表後、金融安定理事会（FSB）は、TCFD がその権限を果たしたと結論付け、ISSB 基準がサステナビリティ開示のグローバルなフレームワークとして機能するべきであることを認識した。そのため、FSB は、2024 年から気候関連情報開示のモニタリングを、TCFD から IFRS 財団に移管することを発表した。

しかし、TCFD の報告義務の対象となる企業は、関連性がある当局が ISSB 基準に基づく報告を認めるまたは要求するように要求事項を修正しない限り、TCFD 提言に沿った開示を継続しなければならない。

規制当局は、企業が公表した気候変動の影響についての情報の品質に焦点を合わせている。例えば、2022 年に英国財務報告評議会（FRC）は、TCFD の開示および財務諸表における気候関連報告のテーマ別レビューを実施した。レビューの結果は、ベストプラクティスの例が存在するため、これらの分野での報告および開示に対してより伝統的な「様子見」アプローチを採用している企業への期待をより明確にしている。FRC は、気候報告は取締役会レベルのトピックとしてしっかりと設定しなければならないことを強調した。

FRC のテーマ別レビューでは、企業が改善できる重要な問題が指摘された。これらの分野は、英国外の TCFD またはサステナビリティ情報についてより広範に報告する企業にとって、有用な考慮事項を提供する可能性がある。

- **粒度と特定性**—企業は、企業全体のリスクおよび機会に関する情報を提供し、必要に応じて事業（business）、セクターおよび地域別に分解して提供しなければならない。
- **バランス**—気候関連のリスクおよび機会に関する議論は、気候関連の機会の可能性を説明する際に、新技術の開発への依存についての議論を含め、予想される規模に比例しなければならない。また、リスクおよび機会の可能性および依存関係を記述する際に、バランスも必要である。例えば、現在の炭素集約型の収益源の喪失は、脱炭素化の必然的な機能であるかもしれません、代替的な収益源は現在、初期段階または開発中の技術に依存しているかもしれません。これらの依存関係の開示は、移行リスクが低炭素経済における機会によって自然に相殺されるという印象を与えないために重要である。
- **他のナラティブ開示との相互リンク**—TCFD の開示は、例えば、シナリオ分析の結果をナラティブ・レポーティング内の企業による全体戦略の説明に組み込むことにより、ナラティブ・レポーティングの他の要素と統合しなければならない。
- **重要性（マテリアリティ）**—企業は、[TCFD の全セクターガイダンスおよび補足ガイダンス](#)をどのように組み込むかについての説明を提供しなければならない。開示が行われていない場合は、省略の理由を含めなければならない。特に、企業がこれらの開示を検討し、重要性がないと判断したかどうか、またはこれらの開示の対象となる事項が企業の内部評価で対処されていないかどうかを明確にしなければならない。
- **TCFD と財務諸表開示のつながり**—TCFD 報告で識別された気候関連リスクと機会は、財務諸表の裏付けとなる判断および見積りに適切に統合されなければならない。企業はまた、気候変動と移行計画に対応して、セグメント別報告の表示と分解された収益開示を再評価することを検討しなければならない。
- **ガバナンス**—企業は、気候関連のパフォーマンス目標の検討および主要な資本的支出、買収および処分に関する決定に対する気候の影響など、気候関連事項の監督に関する具体的な情報を提供しなければならない。また、気候関連リスクをどのように管理しているかおよび気候関連指標が報酬方針に与える影響についても開示を検討しなければならない。
- **戦略**—戦略に関する情報はきめ細かく、シナリオ分析に含まれる詳細レベルは、定量的指標を含め整合していなければならない。リスクと機会に関する企業の議論は、機会に不釣り合いに重み付けしてはならない。
- **リスク管理**—気候関連事項は、全体的なリスク管理プロセスに統合しなければならない。特に、気候関連リスクの優先度および重要性を評価するプロセスを十分に説明しなければならない。気候関連のリスクおよび機会の潜在的な影響は、「高い」や「低い」などの用語のみで説明するのではなく、可能な限り定量化しなければならない。これは、気候関連の機会の影響が、リスクの影響をどの程度上回るかもしれないかまたは上回らないかもしれないかを示す上で特に重要である。
- **指標と目標**—指標は、スコープ 1 および 2 の排出量のみに焦点を絞るのではなく、他の気候関連のリスクと機会の指標も含めなければならない。目標に対する進捗状況の読者の理解をサポートするために、過去データおよび変動の説明を提供しなければならない。

- **保証**—企業は、与えられた保証のレベルおよびそれがカバーするものを明確に説明しなければならない。「検証済み（Verified）」などの用語は、実際に取得されたよりも高いレベルの保証を意味する可能性があるため、避けなければならない。

2023年7月、英国FRCは、気候関連の指標と目標の開示の品質に関するテーマ別レビューの結果を公表した。本レビューは、ネット・ゼロ・コミットメントと中間排出目標に関する企業の開示の品質が徐々に向上していることを示している。しかし、報告書は、以下の点を指摘している。

- 目標を達成するための具体的な行動およびマイルストーンの開示が不明確な場合があり、企業間の指標の比較可能性は依然として困難である。
- 表示する情報の量が多いため、多くの企業は、低炭素経済への移行計画を明確かつ簡潔に説明するのが難しいと感じている。
- 気候目標が財務諸表にどのように影響するかについての説明にはまだ改善が必要である。「検討されている」気候に関する定型的（ボイラープレート）な文章は、影響に関する洞察をほとんど提供しない。

気候関連リスクの広範な内容および重大さ、および利害関係者の期待の高まりと規制当局の注目に鑑み、企業は、自主的または強制的なTCFD開示を提供している、またはISSB基準またはESRSを適用してサステナビリティ関連情報を提供する準備をしているかどうかに関係なく、上記の点を考慮しなければならない。

通貨と超インフレ

高レベルの全般的なインフレ水準による、超インフレ（この用語はIAS第29号「超インフレ経済下における財務報告」で定義されている）の対象となる法域の数が増加している。したがって、企業は以下の課題にますます直面している。

- 経済がIAS第29号で定義されている超インフレであるかどうかを判断することに、困難な場合がある。当該定義には、3年間の累積インフレ率が100%に近づいているかまたは超えるかどうかを含む、超インフレのいくつかの特徴が含まれている。また、財務諸表の金額にどの一般物価指数を適用するべきかを決定することも難しい可能性がある。
- 現地通貨と国際通貨の両方が一般的に使用されている状況での、企業の機能通貨を決定する際の困難。これは、現地通貨が超インフレである場合に特に重大になる可能性がある。IAS第29号は、（その経済で活動する企業によってではなく）機能通貨が超インフレ経済の通貨である企業によってのみ適用される。また、IAS第21号「外国為替レート変動の影響」では、「企業は、IAS第29号に従った修正再表示を、例えば、本基準に従って決定される機能通貨以外の通貨（親会社の機能通貨など）を機能通貨として採用することによって、避けることはできない。」と具体的に規定されることにも留意すべきである。
- 現地通貨とグローバルに取引される通貨間の交換が制限されている場合、単体財務諸表の貨幣性項目を換算し、在外営業活動体の財務諸表を親会社の表示通貨で換算するための適切な為替レートを識別することが困難な場合がある。この問題は超インフレ経済に特有ではないが、「ハード」通貨の不足、したがって為替制限の必要性は、現地通貨が価値を失っている経済の特徴であることが多い。

iGAAP in Focus 財務報告「IASBは、通貨が交換可能な場合、および交換可能でない場合に為替レートをどのように決定するかを明確にするためにIAS第21号を修正する」は、通貨が交換可能である場合および交換可能でない場合に為替レートをどのように決定するかを定めるガイダンスを提供する、
2023年8月にIASBが公表した「交換可能性の欠如」（IAS第21号の修正）を解説している。

インフレまたは為替の問題が重大な判断につながる、または見積りの不確実性の発生要因となる場合、IAS第1号122項および125項で要求されているように開示を提供しなければならない。

2025年10月に公表された国際通貨基金（IMF）の直近のインフレ予測やIAS第29号で定められた指標を含む、執筆時点の入手可能なデータに基づいて、以下の経済は、2025年12月31日以後終了する報告期間の財務諸表においてIAS第29号を適用する目的およびIAS第21号に従った在外営業活動体の再換算を行う超インフレにあると広く考えられている。

- アルゼンチン
- ブルンジ
-
- ハイチ
- シエラレオネ
- 南スーダン
- スーダン
-

- イラン
-
- レバノン
- マラウイ
- ミャンマー（新規）
- シリア
- トルコ
- ベネズエラ
- ジンバブエ

ガーナ、ラオスおよびスリナム

アガーナ、ラオスおよびスリナムは、2025年12月31日以後終了する報告期間について、もはや超インフレ経済として識別されないが、これらは全て継続してモニターするべきである。

ナイジェリア

2025年9月現在、ナイジェリアの3年間の累積インフレ率は98.3%であり（ナイジェリア国家統計局による）、2025年3月から7月にかけては100%をわずかに上回っていた。2025年10月に公表されたIMF世界経済見通しの報告書においては、2025年末までに3年間の累積インフレ率は80%に下がると予想され、2026年にはさらに下がる見通しである。

現在の3年間の累積インフレ率はわずかではあるが100%を下回っており、今後も当該基準を下回ると予想されているため、ナイジェリアは現在のところ超インフレ経済とは識別されていないが、注意深くモニターするべきである。

エジプト

2025年9月現在、エジプトの3年間の累積インフレ率は94.8%であり（エジプト中央銀行による）、2025年4月以降100%を下回っている。2025年10月に公表されたIMF世界経済見通しの報告書には、2025年12月の予測は含まれていないが、2026年6月に3年間の累積インフレ率が63%となる予測が含まれている。

現在の3年間の累積インフレ率はわずかではあるが100%を下回っており、今後も当該基準を下回ると予想されているため、エジプトは現在のところ超インフレ経済とは識別されていないが、注意深くモニターするべきである。

その他の国

2025年10月現在、超インフレをモニターすべき通貨である他の国には、アンゴラ、エチオピアおよびイエメンが含まれる。

企業は、IAS第29号適用の目的のために超インフレと広く考えられる経済のリストが、その報告日までに変更になる可能性があることを、理解しなければならない。

主な新たな会計上の要求事項

今後の会計上の要求事項の完全なリストについては、このニュースレターの付録を参照いただきたい。

IAS第8号30項は、企業に対し、（財務諸表の公表が承認された日までに）公表はされているが未発効の新規および改訂されたIFRS会計基準の起これり得る影響を検討し、（年次財務諸表で）開示することを要求している。これらの開示の十分性は、現在、規制当局が焦点している分野である。

2024年1月1日以後開始する事業年度に発効

負債の流動または非流動への分類

2020年および2022年のIAS第1号の修正は、

- 決済が、現金、資本性金融商品、他の資産またはサービスの相手方への移転を指すことを明確にする、「決済」の定義を導入する。
- 負債の流動または非流動としての分類は、報告期間の末日現在に存在する権利に基づくことを明確化する。
- 分類は、企業が負債の決済を延期する権利行使するかどうかについての見込みの影響を受けないことを規定する。

- ・決済を少なくとも 12 か月にわたり延期する企業の権利に対する、特約条項（covenants）の影響を規定する。
- ・財務諸表の利用者が特約条項付の非流動負債が 12 か月以内に返済すべきものとなる可能性があるリスクを理解できるように、注記で情報を開示する要求事項を導入する。

特に、本修正は、企業が報告期間の末日以前に遵守することが要求される特約条項のみが、報告日から少なくとも 12 か月にわたり、負債の決済を延期する企業の権利に影響を与えることを規定している。逆に、報告期間の終了後にのみ遵守が要求される特約条項は、そのような権利が存在するかどうかに影響を与えない。ただし、企業が将来の特約条項を遵守することに困難がある可能性があると見込んでいる場合には、企業はこのリスクに関する情報を（上記の通り）開示し、継続企業および流動性リスクへの影響を検討しなければならない。

[iGAAP in Focus 財務報告「IASB、特約条項付の負債の分類に関する IAS 第 1 号の修正を公表する」](#)は、IAS 第 1 号の主要な修正点を解説している。

サプライヤー・ファイナンス契約

2023 年、IASB は、企業に対してサプライヤー・ファイナンス契約に関する追加開示を要求するよう、IAS 第 7 号「キャッシュ・フロー計算書」および IFRS 第 7 号を修正した。この情報には、次のものが含まれる。

- ・サプライヤー・ファイナンス契約の契約条件
- ・関連する負債の帳簿価額およびこれらの金額が表示されている科目
- ・サプライヤー・ファイナンス契約に関する金融負債と、サプライヤー・ファイナンス契約の一部ではない比較可能な営業債務の両方の支払期日の範囲
- ・仕入先がすでに資金供給者から支払を受けている負債の帳簿価額

これらの開示要求の目的は、サプライヤー・ファイナンスの契約が企業の負債およびキャッシュ・フロー、および流動性リスクへのエクスポージャーに与える影響を、企業の財務諸表の利用者が評価できるようにすることである。当該目的を達成するために、すべての重要性があるサプライヤー・ファイナンス契約について要求される情報を作成する際に、以下を考慮しなければならない。

- ・異なる条件を有する契約の条件は、別個に開示しなければならない。企業は、使用する集約（または分解）のレベルが、重要性がある情報を省略または不明瞭にしないことを確保しなければならない。
- ・支払期日の範囲が広い場合、追加の範囲（例えば、階層別の範囲）を開示する、および／または範囲を定義する際に行った判断に関する情報を提供する必要がある場合がある。

[iGAAP in Focus 貢献報告「IASB、サプライヤー・ファイナンス契約に対処するために IAS 第 7 号および IFRS 第 7 号を修正」](#)は、IAS 第 7 号および IFRS 第 7 号の主要な修正点を解説している。

2026 年 1 月 1 日以後開始する事業年度に発効

自然依存電力を参照する契約

2024 年 12 月 IASB は、以下について IFRS 第 9 号および IFRS 第 7 号を修正する「自然依存電力を参照する契約」を公表した。

- ・自然条件に依存する源泉から生成される電力を購入する契約が企業の自己使用の予想のために保有されているかどうかを取り扱う適用指針を、IFRS 第 9 号に追加する。
- ・企業が IFRS 第 9 号のヘッジ会計の要求事項を適用し、変動する名目数量の自然依存電力を参照する契約をヘッジ手段として指定する場合、企業がヘッジ対象として電力の変動する名目数量を指定することを認める。
- ・IFRS 第 7 号に関連する開示要求を追加する。

[iGAAP in Focus 貢献報告「IASB は、自然依存電力を参照する契約についての修正を最終化」](#)は、IFRS 第 9 号および IFRS 第 7 号の主要な修正点を解説している。

金融商品の分類および測定の修正

2024年5月IASBは、IFRS第9号およびIFRS第7号を修正し、以下の項目を取り扱う「金融商品の分類及び測定に関する修正」を公表した。

- 電子送金で決済される金融負債の認識の中止
- 金融資産の分類 – 基本的な融資の取決めと整合的な契約条件
- 金融資産の分類 – ノンリコース要素を有する金融資産
- 金融資産の分類 – 契約上リンクしている商品
- 開示 – その他の包括利益を通じて公正価値で測定するもの（FVTOCI）として指定した資本性金融商品に対する投資
- 開示 – 偶発的事象の発生（または不発生）に基づいて契約上のキャッシュ・フローの時期または金額を変化させる可能性のある契約条件

[iGAAP in Focus 財務報告「IASBが金融商品の分類および測定の要求事項の修正を公表」](#)は、IFRS第9号およびIFRS第7号の主要な修正点を解説している。

2027年1月1日以後開始する事業年度に発効

IFRS第18号「財務諸表における表示及び開示」

2024年4月、IASBは、IAS第1号を置き換えるIFRS第18号「財務諸表における表示及び開示」を公表した。新基準は、IAS第1号の要求事項の多くを変更せずに引き継ぎ、以下の新しい要求事項でそれらを補完する。

- 純損益計算書において、指定された区分（営業、投資、財務、法人所得税および非継続事業）と定義された小計を表示する。
- 財務諸表の注記における経営者が定義した業績指標（MPM）に関する開示を提供する。
- 集約と分解を改善する。

IAS第1号の要求事項の一部は、IAS第8号およびIFRS第7号に移動する。IASBはまた、IAS第7号およびIAS第33号「一株当たり利益」に若干の修正も行う。

[iGAAP in Focus 貢献報告「IASBが財務諸表における表示および開示に関する新しい基準を公表」](#)は、IFRS第18号の主要な要求事項を解説している。

IFRS第19号「公的説明責任のない子会社：開示」

2024年5月、IASBは、要件を満たす子会社が財務諸表にIFRS会計基準を適用する際、削減された開示を提供することを認める、IFRS第19号「公的説明責任のない子会社：開示」を公表した。

子会社が公的説明責任を有しておらず、最終的なまたは中間的な親会社が、IFRS会計基準に準拠した、一般的の使用のために利用可能な連結財務諸表を作成している場合、子会社は削減された開示の要件を満たす。

IFRS第19号の適用は、要件を満たす子会社にとって任意であり、そのような子会社は、連結、個別または単独財務諸表に適用が可能である。

2025年8月、IASBは、新たなまたは最近修正されたIFRS会計基準について削減された開示を提供するIFRS第19号の修正を公表した。本修正は、IFRS第19号と同じ発効日である。

[iGAAP in Focus 貢献報告「IASBは、子会社に対する削減された開示のフレームワークを導入する」](#)はIFRS第19号の主要な要求事項を、[iGAAP in Focus 貢献報告「IASB、新たなまたは最近修正されたIFRS会計基準の開示要求を削減するIFRS第19号の修正を公表」](#)は本修正を解説している。

その他の報告に関する検討事項

IFRS 第 15 号「顧客との契約から生じる収益」

IFRS 第 15 号は数年前から企業が適用してきたが、規制当局は、この分野における執行活動において引き続き重大な発見事項を得ている。これらの発見事項は、多くの場合、不適切な開示、特に収益認識に関連して行われた重大な判断に関連している。企業は、財務諸表に含める情報の適切性および明確性を、例えば以下の点で考慮しなければならない。

- すべての重大な収益の源泉。具体的な会計方針、収益認識の時期、一定の期間にわたる収益認識の基礎、適用する方法論を含む。
- 契約、特に長期契約が IFRS 第 15 号の適用範囲における顧客との契約の定義を満たしているかどうかを評価する際に行った重大な判断
- 企業が顧客に財またはサービスを提供する際に、企業が本人または代理人として行動しているかの評価（例えば、企業がオンライン・ショッピングのプラットフォームを運営している、またはソフトウェアのライセンスなどのサービスを提供する場合）
- 企業が既存の契約について認識すると見込んでいる収益の金額および時期に関する情報を開示する IFRS 第 15 号 120 項の要求事項。この情報には、見積りを決定する際に使用した重大な判断、および変更による潜在的な影響の説明を含めなければならない。企業は、例えば、期中の新規契約および解約された契約、発行した請求、グループ構造の変更（例えば、企業結合または処分）の影響、為替の変動の影響を示す、残存履行義務の期首残高と期末残高の間の調整表を含めることを検討する場合がある。

さらに、顧客との長期契約（例えば、工事契約）では、対応する義務の履行が複数の事業年度にまたがっているため、しばしば収益およびコストに関して不確実性が生じる。現在のマクロ経済環境を考慮すると、企業は、特に収益が一定の期間にわたって認識される場合に履行義務の完全な充足に向けて進捗度を測定する際に、使用する予測が合理的で裏付け可能であることを確認しなければならない。契約が不利になった場合、IAS 第 37 号を適用して引当金を認識および測定し、IAS 第 37 号の開示要求を適用しなければならない（特に、経済的便益の流出の量または時期の不確実性の開示、および関連性がある場合には、将来の事象に関して行われた主要な仮定の開示について）。

キャッシュ・フロー計算書

キャッシュ・フローの適切な報告は、投資家および規制当局にとって引き続き焦点が当たる分野である。規制当局が提起した主要な問題には以下が含まれる。

- キャッシュ・フローの営業、投資、または財務への分類は、IAS 第 7 号の定義に準拠しなければならない。
- 現金および現金同等物として表示する金額は、IAS 第 7 号の規定を反映しなければならない。特に、
 - 要求払債務で、企業の資金管理の不可欠な部分の一部となっている銀行当座借越のみを、現金および現金同等物の構成要素として含めなければならない。銀行の借入枠は、実務において残高がマイナスとプラスの間で通常は頻繁に変動しない場合、財務活動の一部として表示しなければならない。
 - 取得時に満期が 3 か月以内の短期投資のみが、通常、現金同等物として適格である。
- 現金および現金同等物の構成要素は開示しなければならない。
- 限定的な状況を除き、キャッシュ・フローは総額ベースで表示しなければならない。
- 非資金取引は、キャッシュ・フロー計算書に表示してはならない。
- 投資および財務活動に関する重要性がある非資金取引は、財務諸表の他の箇所において開示しなければならない。
- キャッシュ・フローの分類に関する重要性がある会計方針および判断（例えば、利息、配当金、制限の対象である現金）を開示しなければならない。

セグメント報告

事業セグメントの識別および集約

IFRS 第 8 号「事業セグメント」は、事業セグメントの識別および開示セグメント情報の測定にマネジメント・アプローチを採用しているため、企業は、経営者報告、最高経営意思決定者（CODM）への報告と財務諸表に含まれるセグメント情報の整合性を確保しなければならない。

事業セグメントを識別する際に、企業は、特定の要件を満たす場合に限り、2 つ以上の事業セグメントを 1 つの事業セグメントに集約することが認められている。当該要件は厳密であり、集約は、非常に均質な事業でのみ可能である。

地政学的な不確実性または気候問題により、企業の事業セグメントまたは集約要件の適用の変更が生じる可能性がある。例えば、企業は、新しい関税の導入のため、組織再編を通じて事業構造を変更する可能性があり、また気候変動の予想される影響により、セグメントが長期的に類似した経済的特徴を持たない可能性があるという指標（indicator）が生じる場合がある。事業セグメントに変更があった場合、企業は、事業セグメントよりも大きい CGU または CGU グループへののれんの配分はできないため、IAS 第 36 号を適用した減損テストの実施に与える影響に留意しなければならない。

企業は、集約された事業セグメントの簡潔な記述、および該当する場合は、それらのセグメントが類似した経済的特徴を共有していることを示す指標を含む、セグメントを識別するために使用したすべての重要性がある要素および集約要件を適用する際に行った判断について、企業固有の開示を提供しなければならない。

地域および主要な顧客に関する情報

貿易障壁および地政学的な不確実性が高まっている現在の環境では、IFRS 第 8 号で要求されている地域および主要顧客に関する全社的な開示は、財務諸表の利用者にとって特に関連性がある可能性がある。例えば、企業の重要性がある収益のすべて（またはほとんどすべて）が外国に帰属しているという事実は、重要性がある情報である可能性がある（特に、それらの外国が貿易制限の対象となる場合）。個々の外国に帰属する外部顧客からの収益またはそこに所在する非流動資産に重要性がある場合、当該収益または非流動資産は区分して開示しなければならない。また、企業は、顧客の地理的位置に基づいて、または販売が行われた場所に基づいて、個々の国または地域に収益がどのように配分されているかを開示する必要がある。

最後に、IFRS 第 8 号は、原則として、取締役会または経営者が企業の利益を損なうとみなす開示の免除を提供していないことは注目に値する。

2024 年 6 月、IFRS 解釈指針委員会は、「報告セグメントに係る収益及び費用の開示」というタイトルのアジェンダ決定を公表した。本アジェンダ決定は、IFRS 第 8 号「事業セグメント」の 23 項(f)の、各報告セグメントに関して、IAS 第 1 号 97 項に従って開示する重要性がある収益および費用の項目を開示するという要求事項を取り扱っている。

アジェンダ決定で強調された主要なポイントは次のとおりである。

- 企業は、以下いずれかの場合に、各報告セグメントに関して所定の金額を開示することが要求される。
 - たとえ CODM に個別に提供されたりレビューされたりしていなくても、CODM がレビューしているセグメント純損益の測定値に含まれる場合
 - たとえセグメント純損益の測定値に含まれていなくても、CODM に定期的に提供されている場合
 - 開示すべき重要性がある項目には、IAS 第 1 号 98 項に列挙されている項目（例えば、資産の評価減、リストラクチャリング費用または処分損益）が含まれるが、これらに限定されない。
 - 企業は、純損益計算書に表示または注記に開示されている収益および費用の各項目を、報告セグメント別に開示することは要求されない。
 - 各報告セグメントについて開示すべき情報を決定するにあたり、企業は判断を適用し、以下の点を考慮する。
 - IAS 第 1 号における重要性および集約の原則
 - IFRS 第 8 号の中核となる原則。その原則は、企業が従事している事業活動および事業を営んでいる経済環境の性質および財務上の影響を財務諸表の利用者が評価できるようにするための情報を、企業が開示することを要求している。
- 企業は、以下の場合、セグメント情報で開示されている情報が IFRS 解釈指針委員会のアジェンダ決定の説明資料と整合しているかどうかを検討しなければならない。
- （たとえ CODM に個別に提供されたりレビューされたりしていなくても、） CODM がレビューしているセグメント純損益の測定値に重要性がある収益および費用の項目が含まれる場合。
 - （たとえセグメントの純損益の測定値に含まれていなくても、） そのような重要性のある項目に関する情報が CODM に提供されている場合。

繰延税金資産の認識および移転価格を含む法人所得税

企業は、現在のマクロ経済環境に起因する利益水準の低下または激しい変動が法人所得税会計にどのように影響するかを検討しなければならない。例えば、当期の収益の減少または損失の発生は、予想利益の減少と相まって、企業の繰延税金資産の一部または全部を回収可能である可能性が高いかどうかの再評価につながる可能性がある。利益の減少または減損が損失を生じる場合、企業は、関連する繰延税金資産の全部または一部を実現するために、税法で利用可能な繰戻しおよび繰越期間内に十分な所得があるかどうかを検討する必要がある。

IAS 第 12 号「法人所得税」を適用して、企業は、子会社、支店および関連会社、および共同支配の取決めの持分に関連する将来加算一時差異に対する繰延税金負債を認識していない可能性があるが、これは、一時差異を解消する時期をコントロールすることができ、当該一時差異が予測可能な期間内に解消しない可能性が高いとみなされたと結論づけたためである。逆に、企業は、一時差異が予測可能な期間内に解消する可能性が高いと判断した（および繰延税金資産を回収できる可能性が高いと判断した）ため、そのような投資に関連する将来減算一時差異について繰延税金資産を認識した可能性がある。企業またはその子会社が流動性の問題または現在のマクロ経済環境に起因する他の課題を有しており、投資先の未分配利益の本国送金に関する意図に変更がある場合、これらの結論を再検討することが適切である可能性がある。

開示は、この分野でも重要である。特に、近年の損失の履歴がある場合の繰延税金資産の認識を裏付ける証拠の内容に関する企業固有の情報、および関連性のある感応度および／または今後 12 か月で起こりうる結果の範囲を含む、繰延税金の判断および見積りについてである。

世界貿易の変化の結果として、企業は、移転価格の方針を変更する可能性がある。IFRIC 第 23 号「法人所得税の税務処理に関する不確実性」を適用し、企業は、関連性がある税務当局が結果として生じる税務処理を認める可能性が高いかどうかを検討しなければならない。そうではない場合、企業は、IFRIC 第 23 号の要求事項を適用して、関連する税金を算定する際に不確実性の影響を反映しなければならない。移転価格の変更および関連する不確実な税務処理について、重要性がある場合、関連性がある開示を検討しなければならない。

税源浸食と利益移転に関する OECD/G20 の包摂的枠組み

2022 年 3 月経済協力開発機構（OECD）は、経済のデジタル化から生じる税の課題に対処するためのプロジェクトの第 2 の「柱」として合意された 15% のグローバル・ミニマム課税について [テクニカル・ガイダンス](#) を公表した。このガイダンスは、[2021 年 12 月に合意し公表されたグローバル税源侵食防止（GloBE）ルール](#) の適用および運用について詳しく説明している。これは、収益が 7 億 5,000 万ユーロを超える多国籍企業（MNE）が、事業を行う各法域で発生する所得に対して少なくとも 15% の税金を支払うことを保証するための調整されたシステムを構築する。

第 2 の柱モデルルールの対象となる可能性のある企業は、営業を行っている法域における法制化のプロセスをモニターし、いずれかの法域において第 2 の柱の法制が制定（または実質的に制定）されているかどうかを評価する必要がある。

第 2 の柱の法制が発効した場合に要求される開示

第 2 の柱の法制が発効してから、企業は、該当する場合、第 2 の柱の法人所得税に関連する当期税金費用（収益）を区分して開示しなければならない。

第 2 の柱の法制が制定または実質的に制定されているが未発効である場合に要求される開示

第 2 の柱の法制が制定または実質的に制定されているが未発効である期間、IAS 第 12 号は、企業が報告期間の末日に第 2 の柱の法人所得税に対するエクスポージャーに関する定性的および定量的情報を開示することを要求している。その情報は、法制のすべての具体的な要求事項を反映する必要はなく、示唆的な範囲の形で提供することができる。情報が既知でなく合理的に見積可能でもない範囲では、企業は代わりに、その旨の記述およびエクスポージャーの評価における企業の進捗状況に関する情報を開示しなければならない。

これらの開示要求を満たすために企業が開示する可能性のある情報の例には、以下のものがある。

- 企業が第 2 の柱の法制によりどのように影響を受けるか、および第 2 の柱の所得税に対するエクスポージャーが存在する可能性のある主な法域に関する情報のような定性的情報
- 以下のような定量的情報:

–企業の利益のうち第 2 の柱の法人所得税の対象となる可能性のある割合と、それらの利益に適用される平均実効税率を示す。または

- 第 2 の柱の法制が発効していた場合に、企業の平均実効税率がどのように変化したかを示す。

第 2 の柱の法制が制定または実質的に制定されていない場合に要求される開示

IAS 第 12 号の修正は、法制が制定されているまたは実質的に制定されている後に提供する開示を規定しているが、それにも関わらず、企業は、開示がそれ以前の期間に要求されるかどうかを評価しなければならない。

実際 IAS 第 1 号 17 項(c)は、適正な表示のためには、IFRS 会計基準が具体的に要求する情報に加えて、財務諸表の利用者が、企業の財政状態および財務業績に対する特定の事象および状況の影響を理解できるようにするための開示を提供することを、企業に要求する場合があることを示している。

したがって企業は、事業を行う法域における第 2 の柱ルールの実施に対するコミットメントのレベルが、これらの 1 つ以上の法域の税法に第 2 の柱のモデルルールを組み込むことが予想されることを示しているかどうかを評価しなければならない。この場合、かつ、当該ルールが企業の事業に重大な影響を与える可能性があると企業が結論付けた場合には、その事実を関連性のある情報（例えば、上記の IAS 第 12 号の修正により要求される情報）とともに開示しなければならない。

第 2 の柱の法人所得税に対する重要性があるエクスポージャーが見込まれない企業

多国籍企業が第 2 の柱の法人所得税に対するエクスポージャーを見込んでいない、または当該エクspoージャーに重要性がないと見込んでいるという事実は、（第 2 の柱の法人所得税に対する重要性があるエクspoージャーがあると見込んでいない理由とともに）企業が開示を検討すべき関連性のある情報である可能性がある。この情報は、企業の収益が 7 億 5,000 万ユーロを超える場合（したがって、第 2 の柱のモデルルールの範囲に含まれる場合）に、より関連性がある可能性が高い。

企業は、潜在的なエクspoージャーを決定する際に、さまざまな仮定を行うことが要求される場合がある。IAS 第 1 号 125 項は、将来に関して行う仮定および見積りの不確実性のその他の主要な発生要因のうち、翌事業年度中に重要性がある修正を生じる重大なリスクがあるものに関する開示を要求している。第 2 の柱の法人所得税に対する潜在的なエクspoージャーの重要性がない可能性が高いと企業が評価する場合、それにもかかわらず、例えば、仮定の変更によりエクspoージャーに重要性があることになる可能性があるという重大なリスクを検討するかもしれない。この場合、IAS 第 1 号 125 項の要求事項を満たすために、さらなる情報を開示すべきかどうかを検討しなければならない。

米国の新税法 – 「One Big Beautiful Bill Act」

2025 年 7 月 4 日、「An Act to Provide for Reconciliation Pursuant to Title II of H. Con. Res. 14」（一般に「One Big Beautiful Bill Act」と呼ばれる）（以下、「同法」という。）が米国連邦法として署名された。

同法は、特に、次の内容を規定している。

- ・適格事業用不動産の全額費用化（「100%ボーナス減価償却」）の恒久的な延長、国内研究開発（R&D）費用の即時損金算入、純事業利息を損金算入するためのより寛大な計算式を含む、2017 年の減税および雇用法の多くの規定を延長する。
- ・税源浸食および乱用防止税（BEAT）に適用する税率を 0.5% 引き上げる。これは、議会の行動がなければ適用されたであろう引き上げよりも低いものである。
- ・2026 年に適用されるはずだったグローバル無形資産低課税所得（GILTI）制度および外国稼得無形資産所得（FDII）制度の両方に対する特別控除額の削減を廃止する。

同法には、いくつかのクリーンエネルギー税制優遇措置の段階的廃止および制限等、いくつかの増税規定も含まれており、また GILTI および FDII に広く適用されるさまざまな変更が加えられており、これらの制度の変更の全体的な影響は、個別の企業の事実と状況による可能性が高いことを意味する。

IAS 第 12 号を適用する目的では、これらの変更は、2025 年 7 月 4 日に実質的に制定されたものと考えなければならない。その日より前に終了する報告期間については、法人所得税の認識および測定は影響を受けないが、IAS 第 10 号（または期中報告期間については、IAS 第 34 号「期中財務報告」）に基づく修正を要しない後発事象の開示の必要性を検討しなければならない。

2025年7月4日以後終了する報告期間について、同法は、米国で事業を展開する企業の当期税金と繰延税金残高の両方に影響を与える可能性がある。

当期税金

同法の規定の多くは、将来の課税年度に発効する予定である。しかし、当期利益に対する税金支払額に影響を与えるまたは以前の課税年度に遡及して適用される場合は、財務業績計算書で認識される当期税金に反映される。

同法が当期税金に与える影響は、（例えば、2021年12月31日より後2025年1月1日より前に支払ったまたは発生した資産化された国内R&Dの残りの未償却残高を損金算入する選択の使用、または2025年1月19日より後に取得および使用された不動産の100%ボーナス減価償却の復活を通じた）減少と（例えば、2025年9月30日より後に取得した車両に対する適格事業用クリーン自動車クレジットの終了、または法人代替ミニマム税制の下でより高い税額の対象となる企業は、同法による税負担の増加を通じた）増加の両方をもたらす可能性があるため、総合的に検討しなければならない。

繰延税金

将来年度に解消が見込まれる一時差異に関する繰延税金資産および負債は、その解消が発生したときに適用されると予想される実質的に制定された税法に基づいて認識および測定しなければならない。その結果、2025年に当期税金負債が変動しない場合でも、同法は（2025年7月4日以後終了する期間について）以下に影響を与える可能性がある。

- 例えば、国内R&Dコストの即時費用化またはボーナス減価償却の復活による一時差異の金額
- GILTI税制の変更の結果として、繰延税金残高の測定
- 同法により将来の課税所得の予想を変更する場合、繰延税金資産の認識

米国のデロイトの次のニュースレターは、さらなる情報を提供している。

- *Heads Up – Accounting Considerations Related to the New U.S. Tax Legislation*
- *A closer look – Inside the new tax law*

さらに、デロイトの [IFRS in Focus「米国税制改正法のIFRSにおける影響の会計処理」](#)では、2017年の減税および雇用法に関するさらなる背景を解説している。

非 GAAP および代替的業績指標

重大な経済変化または通例ではない事象は、しばしば、業績への影響または事象が発生しなかった場合の企業の利益を強調したいという欲求につながる。しかし、このようなアプローチに従う場合には注意が必要である。

このような変化または事象の影響が広範囲であるという性質は、別個の表示が企業の全体的な財務業績を忠実に表現せず、利用者の財務諸表の理解に誤解を招く可能性があることを意味する。

一般的に、経済的または地政学的な事象の影響が非GAAP指標または代替的業績指標(APM)を通じて適切に反映できるかどうかを評価する際には、以下を含むがこれらに限定されない要因を検討しなければならない。

- 調整された指標から除外される項目は、事象または経済状況に直接関係していることを証明できるか？
- 当該項目は「ニューノーマル」の反映ではなく、通常の営業に増分なものであるか？
- 当該項目は、見積りまたは予測とは対照的に、客観的に定量化可能であるか？

このような事象の広範な影響を純損益に別個に表示しようとするのではなく、資産、負債、および純損益の数値への影響の認識、測定および表示に適用される重大な影響、判断および仮定に関する定性的および定量的情報を注記で開示することが適切である可能性が高い。

そのような影響は、明確かつバイアスのない方法で提供しなければならない。

さらに APM の定義および計算は、期間にわたり一貫していなければならない。

非 GAAP 指標または APM をマネジメント・レポートに含める場合、企業は、引き続き関連性がある非 GAAP 財務指標に関する証券監督者国際機構 (IOSCO) の声明そして代替的業績指標に関する ESMA のガイドライン（2020 年に更新）または法域における同等のものについて、協議しなければならない。

後発事象

期末以降の新たな問題または新たな進展の出現は、報告期間の末日に存在した状況についての証拠を提供する修正を要する後発事象と、報告期間後に発生した状況を示す修正を要しない後発事象を区別するために、慎重な検討が要求される場合がある。この評価は、判断が要求されることが多い。

この区別は、当該事象自体をどの報告期間に会計処理すべきかを決定するだけでなく、将来の見通しに関する計算および関連する開示にとっても重要である。例えば、IAS 第 36 号に基づく減損レビュー、IFRS 第 15 号に基づく履行義務の完全な充足に向けての進捗度を測定するために使用する場合がある完了までのコストの見積り、IFRS 第 9 号に基づく予想信用損失計算、または合理的に考え得る予測の変化に対する感応度の開示は、報告日の状況に基づかなければならず、その後の修正を要しない後発事象の影響を受けない。報告日以降に評価がどのように変化したかについて追加の開示を提供することは有益かもしれないが、これは報告日現在の情報とは異なるものとして明確に識別しなければならない。

例えば、報告日後に新しい関税または既存の関税の変更が発表された場合、企業は、当該発表が報告日に合理的に予想できたかどうかを評価するために判断を適用しなければならない。そうである場合、企業は、減損の分析の実施に使用したキャッシュ・フロー（関連性がある場合には、シナリオの確率加重を含む）を、報告日に合理的に予想される条件を反映するように更新しなければならないかどうかを検討しなければならない。報告日時点では、新しい関税または既存の関税の変更が合理的に予想できなかったと企業が判断した場合、減損の計算は修正されず、代わりに（重要性がある場合には）当該発表に関する関連性がある情報を開示しなければならない。

企業結合および他の取得取引

企業結合および他の類似の取引は複雑になる可能性があり、その会計処理には、例えば、以下の決定のために重大な判断が伴う場合がある。

- 取引が企業結合の定義を満たしているか、または資産の購入として会計処理しなければならないか。
- 取引が企業結合である場合、企業結合の一部を構成する取引の要素と、別個の取引として会計処理しなければならない要素を識別する（例えば、特定の支払いが購入価格の一部を形成するか、報酬としなければならないか）。
- 当該取引が投資先に対する支配、共同支配、または重要な影響力をもたらすかどうか。この評価は、議決権以外の要因が関係する場合に特に判断が要求される場合がある。例えば、
 - 株主間の契約に基づく、議決権行使または取締役の指名に関する特別な権利の存在
 - 投資先が特定の法制度の対象となる場合（例えば、政府機関の関与または取締役の指名）
 - 例えば、投資先への資本の関与を制限するなど、企業（投資者）が法的規定の対象となるかどうか。
 - 企業または第三者が保有するオプションまたはその他の潜在的な議決権

企業結合および他の取得取引は非常に重大となる可能性があり、企業は、当該取引の影響および当該取引をどのように会計処理するかを決定する際に行った重大な判断について明確で整合的な説明を行わなければならない。これには、以下が含まれる場合がある。

- 資産のグループが企業結合であり、IFRS 第 3 号「企業結合」を適用して会計処理しなければならないかどうかを決定する際に伴う判断
- のれんを生じさせる要因の説明。定型的な開示ではなく、対象の企業結合を参照する。
- 条件付対価の取決め説明および支払額の潜在的な変動性の説明。

- IFRS 第 12 号「他の企業への関与の開示」の 7 項から 9 項で要求される、支配、共同支配、および重要な影響力を評価する際に行った重大な判断に関する情報。

2023 年 12 月、IOSCO は、財務諸表で認識および開示されたのれんの信頼性、忠実な表現および透明性を向上することを目的とした「[のれんの会計処理に関する提言](#)」を公表した。IOSCO は、財務諸表の作成者に対して 4 つの提言を行っている。

- すべての識別可能な無形資産を適切に認識し、企業結合で認識したのれんを構成する要因の企業固有の開示を提供する。
- 減損テストで使用される仮定が、合理的で裏付け可能であることを立証するのに十分な証拠を得る。
- のれんの減損テストで使用される仮定と非財務情報開示の整合性を確保する。
- 主要な仮定をどのように決定しているかを含む、のれんの減損テストを明確に開示する。

最後の提言に関して、IOSCO は、好事例には次の開示が含まれることを指摘している。:

- 公正価値または使用価値が CGU または CGU のグループの帳簿価額を超える割合（特に、翌事業年度中にのれんの帳簿価額に重要性がある修正が生じる重大なリスクがある場合）
- 主要な仮定に関連する不確実性的程度。例えば、評価モデルにおける仮定に関する不確実性は、不確実性のある時間軸を有する可能性のある景気後退からの景気回復に対する将来の期待を伴う可能性がある。
- 主要な仮定に悪影響を与えることが合理的に見込まれ得る潜在的な事象および/または状況の変化

IAS 第 33 号「1 株当たり利益」

基本的 1 株当たり利益 (EPS) および希薄化後 EPS は、多くの場合、企業の業績の重要な指標と考えられているため、多くの場合、ある期間の決算発表および財務諸表に含まれている。しかし、当該数値の計算は非常に複雑になる可能性があり、利用者が常によく理解できるとは限らない。³財務諸表の作成においてなされた重大な判断を開示するという IAS 第 1 号の一般的な要求事項は、EPS の計算にも適用されることに留意すべきである（例えば、株式再編の実質を決定する際に判断が必要な場合）。

誤って適用されやすい EPS の計算についての IAS 第 33 号の要求事項を、以下に記載する。

- 潜在的な普通株式が希薄化または逆希薄化であるかどうかの決定は、継続事業からの利益または損失に基づいて行わなければならない。
- 無償部分を含む株式再編成では、表示するすべての期間の基本的 EPS および希薄化後 EPS の計算に使用される普通株式の加重平均数を遡及的に調整することが要求される。
- 優先株式が資本に分類される場合、基本的 EPS および希薄化後 EPS の計算に使用される利益は、配当および償還において生じるプレミアムを含む、優先株式のすべての影響を調整する。

非 GAAP 指標の使用に関するガイダンス（「非 GAAP および代替的業績指標」を参照）は、調整後 EPS 数値の表示にも適用される。特に、IAS 第 33 号で要求されているように、EPS 指標よりも目立たせてはならず、その算定方法（調整項目に対する税金に対して使用する基礎を含む）を明確に開示しなければならない。

IFRS 第 17 号「保険契約」

IFRS 第 17 号は、2023 年 1 月 1 日以後開始する事業年度に発効した。2024 年 10 月、ESMA は「[From “black box” to “open book”? – IFRS 第 17 号『保険契約』の最初の適用による証拠](#)」を公表し、欧州の保険会社のサンプルの財務諸表のレビューからの所見および推奨事項を提供している。

IFRS 第 17 号の継続的な適用に関する事項について、ESMA は、会計方針、判断および見積りに関連する開示が、しばしば企業固有のものではなく、または限定的な場合では欠落していると指摘している。この点に関して、本報告では、例を挙げている。

³ 例えば、2022 年 9 月に公表された[英国 FRC の 1 株当たり利益のテーマ別レビュー](#)では、EPS の計算におけるより一般的な誤りを強調しており、企業に特定の主要な要求事項をリマインドしている。

また、一部の企業が、財務諸表の外（例えば、経営者による説明またはリスクレポート）において、財務諸表からの相互参照の使用を含む、保険契約から生じるリスクの性質および範囲に関する開示を表示していることを、ESMAは観察しているが、これは IFRS 第 17 号では認められていない。IFRS 第 17 号が要求する開示は、財務諸表の注記に含めなければならない。

経営者による説明

2025 年 6 月、IASB は、経営者による説明および類似の報告書の改善を支援するため、要求事項のグローバルな整合性の強化も含む、経営者による説明に関する改訂実務記述書を公表した。改訂実務記述書は、どの企業が経営者による説明を作成することが要求されるか、どのくらいの頻度で作成しなければならないか、誰が経営者による説明の発行を承認すべきか、または経営者による説明が対象となる外部保証の水準を明記していない。改訂実務記述書は、規制当局が国内の要求事項および経営者による説明に関するガイダンスを更新または開発する際に使用する、グローバルなベンチマークを提供するとともに、企業が投資者のニーズを満たす情報を提供するための包括的な資源を提供することを目的としている。iGAAP in Focus 財務報告「IASB、経営者による説明に関する改訂実務記述書を公表」は、経営者による説明に関する実務記述書について詳細に解説している。

期中財務報告

適時性がありかつ高品質の期中開示は、財務諸表の主要な利用者にとって重要である。期中財務諸表を作成する際に最も関連性がある可能性が高い検討領域について、本ニュースレターにおいてすでに説明されているものに加え、以下で説明する。

重要な事象および取引

要約期中財務諸表を作成する企業は、IAS 第 34 号「期中財務報告」15 項に従い、「直近の年次報告期間の末日以降の企業の財政状態の変動および業績を理解する上で重大な事象および取引の説明」を提供することが要求される。重大である場合に、開示を検討する場合がある事象の網羅的ではないリストは、IAS 第 34 号 15B 項に示されている。さらに、IAS 第 34 号 16A 項は、会計方針および計算方法の変更に関するものを含め、要約期中財務諸表の注記において行うべき開示を規定している。

現在のマクロ経済的および地政学的環境から生じる継続的な不確実性に企業が対応するため、要約期中財務諸表の注記で開示する必要がある可能性がある他の重要な事象が存在する可能性が高い。

見積り

不確実性の継続的なレベルを考慮すると、企業は期中報告期間中に（例えば、新しい関税の賦課または金利の変化の結果として）見積りを修正し、IAS 第 34 号 16A 項(d)に従って開示を提供する必要があるかもしれない。この場合、開示は、特に資産および負債について、直近の年次報告日よりも見積り方法の使用が多い場合は、見積りの変更の理由および使用した見積り方法を明確に説明しなければならない。

資産の減損

減損損失および減損損失の戻入れに関する IFRS 会計基準の要求事項は、要約期中財務諸表に適用される。

多くの資産（のれん、有形固定資産、使用権資産、無形資産、および子会社、共同支配企業および関連会社への投資を含む）については、IAS 第 36 号に従って、報告日に、減損または以前の減損の戻入れの兆候があるかどうかを評価し（禁止されている以前ののれんの減損の戻入れを除く）、もしそうである場合、回収可能価額（使用価値と処分コスト控除後の公正価値のうちいずれか高い方）を算定することを意味する。企業は、直近の年次報告日に到達した結論に関係なく、期中報告日時点での減損の兆候の存在を評価しなければならない。

環境の不確実性により、直近の年次報告日における使用価値または処分コスト控除後の公正価値の計算において、以前に使用された予測キャッシュ・フローは、その後の期中報告日の状況をもはや反映しない可能性がある。この場合、企業は、期中報告日における経営者の改訂した予想と更新した状況を反映した、新しいまたは更新した予測を作成する必要がある。

期中報告期間中に重要性のある減損損失が認識された場合、企業は IAS 第 34 号 15B 項(b)により要求されるように、当該損失に関する追加の開示を検討しなければならない。

継続企業

IAS 第 1 号 25 項および 26 項が定める継続企業の要求事項は、期中財務諸表に適用される。したがって、経営者は、期中報告期間の終了から少なくとも 12 か月間継続企業として存続する企業の能力に重大な疑義を生じさせるような事象または状態に関連する重要性のある不確実性があるかどうかを検討する必要がある。この評価を行うにあたり、企業は期中財務諸表の承認日までに入手可能なすべての情報を考慮しなければならない。

さらに、企業は、新しい情報または更新された情報により、要約期中財務諸表に継続企業の評価について開示することが要求されるかどうかを検討する必要がある。

認識および測定

要約期中財務諸表の資産、負債、収益および費用を認識する原則は、年次財務諸表と同じである。IAS 第 34 号 41 項は、期中財務諸表で使用される測定の手続が、信頼性のある情報をもたらし、すべての重要性があり関連性がある財務情報が、適切に開示されることを要求している。したがって、本ニュースレターの他の箇所に記載されている課題、例えば非金融資産の回収可能価額および金融資産の予想信用損失引当金の測定は、期中財務諸表でも同様に取り扱わなければならない。それにもかかわらず、IAS 第 34 号は、年次財務諸表および期中財務諸表の両方に合理的な見積りがしばしば使用されるが、期中財務諸表は一般に年次財務諸表よりも見積方法をより多く使用することが必要になることを認めている。

法人所得税の会計処理

期中財務報告書には、次の年次財務諸表に適用されるものと同じ会計上の認識および測定原則を適用すべきであるという基本原則と一致して、期中報告期間の法人所得税費用は、年間の見積利益総額に適用される税率、すなわち、期中報告期間の税引前利益に適用される見積平均年次実効税率を用いて計上する。

実務的な範囲内で、見積平均年次実効税率は租税区域ごとに決定され、租税区域ごとの期中税引前利益に個別に適用される。利益の種類が異なるごとに異なる税率が適用される場合にも、同じ原則が適用される。世界貿易の変化およびマクロ経済の不確実性によってたらされる不確実性の結果として、企業はそのような精度で期中税金計算を行う際に、困難に直面する可能性がある。この場合、企業は、より個別の税率を使用した場合の結果に比して合理的な近似値となるものであれば、各租税区域全体または各種利益全体の加重平均を使用することが認められる。

また、IAS 第 34 号に基づく期中財務報告のために、予測キャッシュ・フローの調整（非金融資産の減損の文脈で議論されるものなど）も、企業の見積年次実効税率（AEFR）に織り込む必要があるかもしれない。さらに、不確実性のあるビジネス環境の状況では、これらのキャッシュ・フローの見積りはより頻繁に改訂される可能性が高く、それに伴い、AEFR が変更された場合、ある期中報告期間に法人所得税費用として計上した金額も、その後の期中報告期間で調整する必要が生じる可能性がある。AEFR は、累計ベースで再見積りされる。

IAS 第 12 号の繰延税金資産の認識を裏付ける規準は、各期中報告期間の末日に適用され、それらが満たされた場合に限り、当期の税務上の欠損金の便益を見積平均年次実効税率の計算に反映することができる。

期中財務諸表における第 2 の柱の法人所得税

IAS 第 34 号 B12 項に従って、第 2 の柱の法人所得税は、期中報告期間において、年間の見積利益総額に適用される税率を使用して計上する。この税率は、年間の見積調整後対象租税額と見積 GloBE 純所得に基づいて決定される。

AEFR は、期中報告期間の末日までに制定された、または実質的に制定された税率（および税法）を使用して見積もらなければならぬ。

実務においては、期中報告日における予想年次 GloBE 所得の算定および予想年次 GloBE 所得の期中報告期間への帰属には、重大な見積りが伴う場合がある。IAS 第 34 号 B14 項に記載されているように、利益の種類が異なるごとに異なる税率が適用される場合には、実務的な範囲内で、期中税引前利益の個々の種類ごとに、別々の税率が適用される。しかし、すべての場合に達成可能とは限らず、もし個別の税率を使用した場合の結果に比して合理的な近似値となるものであれば、各種利益全体の加重平均税率が用いられる。

その他の開示

上記で説明したように、IAS 第 34 号の包括的な目的は、期中財務諸表が年次財務諸表に含まれる関連性のある情報の説明および更新を提供することである。上記の具体的な検討事項に加えて、企業は、包括的な目的を達成するために必要となる可能性のある追加の開示を検討する必要があり、現在の不安定で不確実性のある環境では、期中報告期間の後発事象の結果として生じる重大な影響について追加の開示が要求される場合がある。

IAS 第 1 号は、一般に、IAS 第 34 号に従って作成された要約期中財務諸表の構成および内容には適用されないが、IAS 第 1 号 4 項は、IAS 第 1 号 15 項から 35 項が期中財務諸表に適用されることを明確にしている。IAS 第 1 号 17 項および 31 項はいずれも、特定の取引、その他の事象および状況が企業の財政状態および財務業績に与えている影響について利用者が理解できるようにするために必要な場合、IFRS 会計基準で規定されている情報に対する追加情報を要求する。企業の財務状況が直近の年次財務諸表から著しく変化した可能性がある現在の状況では、（年次）財務諸表の完全なセットについてのみに通常要求される開示の一部は、期中報告期間中に発生した状況の結果に関する関連性のある情報を提供する場合がある。

• 付録

新しいおよび改訂 IFRS 会計基準および解釈指針

IAS 第 8 号第 30 項は、新しいおよび改訂 IFRS 会計基準が公表されたが未発効の場合、その潜在的な影響を検討し、(年次財務諸表において) 開示することを企業に要求している。これらの開示の十分性は、現在の規制上の焦点となっている領域である。

以下のリストは、2025 年 10 月 31 日時点のものを反映している。当該日以後、財務諸表が発行される前に、IASB が公表した新しいおよび改訂 IFRS 会計基準の適用による潜在的な影響についても検討し、開示しなければならない。

以下の表は、さまざまな四半期報告期間について、2025 年 9 月 30 日現在の基準等の概要を示している。

この表は、すべての事業年度に使用可能である。2025 年 9 月 30 日に終了する第 1 四半期は、事業年度が 2025 年 7 月 1 日に開始することを意味する。同様に、2025 年 9 月 30 日に終了する第 2 四半期は 2025 年 4 月 1 日に開始する事業年度を指し、2025 年 9 月 30 日に終了する第 3 四半期は 2025 年 1 月 1 日に開始する事業年度を指し、2025 年 9 月 30 日に終了する第 4 四半期は 2024 年 10 月 1 日に開始する事業年度を指す。

基準等	発効日	2025 年 9 月 30 日での適用			
		第 1 四半期	第 2 四半期	第 3 四半期	第 4 四半期
「特約条項付の非流動負債」(IAS 第 1 号の修正) および 「負債の流動または非流動への分類」(IAS 第 1 号の修正)	2024 年 1 月 1 日	適用済	適用済	適用済	強制適用
「セール・アンド・リースバックにおけるリース負債」(IFRS 第 16 号の修正)	2024 年 1 月 1 日	適用済	適用済	適用済	強制適用
「サプライヤー・ファイナンス契約」(IAS 第 7 号および IFRS 第 7 号の修正)	2024 年 1 月 1 日	適用済	適用済	適用済	強制適用
「交換可能性の欠如」(IAS 第 21 号の修正)	2025 年 1 月 1 日	強制適用	強制適用	強制適用	早期適用可
「金融商品の分類及び測定に関する修正」(IFRS 第 9 号および IFRS 第 7 号の修正)	2026 年 1 月 1 日	早期適用可	早期適用可	早期適用可	早期適用可
「IFRS 会計基準の年次改善—第 11 集」	2026 年 1 月 1 日	早期適用可	早期適用可	早期適用可	早期適用可
「自然依存電力を参照する契約」(IFRS 第 9 号および IFRS 第 7 号の修正)	2026 年 1 月 1 日	早期適用可	早期適用可	早期適用可	早期適用可
IFRS 第 18 号「財務諸表における表示及び開示」	2027 年 1 月 1 日	早期適用可	早期適用可	早期適用可	早期適用可
IFRS 第 19 号「公的説明責任のない子会社：開示」 (2025 年 8 月に修正)	2027 年 1 月 1 日	早期適用可	早期適用可	早期適用可	早期適用可

最近の IFRS 解釈指針委員会のアジェンダ決定

IFRS 解釈指針委員会は、アジェンダに追加しないことを決定した論点の要約を、通常提出された会計上の論点の議論とともに、定期的に公表している。

2020 年 8 月、IFRS 財団の評議員会は、更新版 [IFRS 財団デュー・プロセス・ハンドブック](#) を公表し、IFRS 解釈指針委員会が公表したアジェンダ決定の説明的資料が、IFRS 会計基準自体から権限を得ており、したがって、アジェンダ決定が会計方針の変更をもたらす場合に適用される遡及適用について、IAS 第 8 号の一般的な要求事項により適用が要求されることを確立した。

IFRS 財団のデュー・プロセス・ハンドブックおよび各 [IFRIC Update](#) はまた、企業がその決定を行い、必要な会計方針の変更を決定し実施するための十分な時間（例えば、新たな情報の入手またはそのシステムの適応）を与えることが期待されていることを指摘している。会計方針の変更を行うために十分な時間がどのくらいなのであるかの決定は、企業の具体的な事実と状況に応じて決まる判断の問題である。それでも、企業は、どのような変更も適時に実施し、重要性がある場合には、当該変更に関する開示が、IFRS 会計基準で要求されているかどうかを検討することが期待される。

過去 12 か月間に、以下のアジェンダ決定が委員会によって公表された。

2024 年 11 月 IFRIC Update	IAS 第 7 号「キャッシュ・フロー計算書」—「評価損益に対する担保差入」契約の変動証拠金担保（マージン・コール）に係るキャッシュ・フローの分類
	他の企業の義務に対して発行する保証
2025 年 3 月 IFRIC Update	IFRS 第 15 号「顧客との契約から生じる収益」—授業料から生じる収益の認識
	IAS 第 38 号「無形資産」—気候関連支出から生じる無形資産の認識
2025 年 6 月 IFRIC Update	IAS 第 29 号「超インフレ経済下における財務報告」—超インフレ経済の指標の評価

過去 12 か月に本ニュースレターに加えられた主な変更点

日付	セクション	変更点
2025 年 10 月	<ul style="list-style-type: none"> 不確実性のある時代における開示（新規） 非金融資産の減損 IFRS 第 15 号「顧客との契約から生じる収益」 リストラクチャリング引当金（新規） 欧州連合の企業サステナビリティ報告指令（CSRD）および欧州サステナビリティ報告基準（ESRS） その他の報告に関する検討事項 – セグメント報告（新規） 	規制当局による最近の公表物に起因する更新
2025 年 10 月	通貨および超インフレ	超インフレ経済のリストを更新
2025 年 10 月	サステナビリティ報告の進展 – 米国	SEC 規則のステータス、および SB-253 および SB-261 に基づく報告の更新
2025 年 10 月	サステナビリティ報告の進展 – 温室効果ガスプロトコル	「スコープ 2 ガイダンス」の更新案についての協議の解説
2025 年 9 月	継続企業	継続企業の評価についての IASB の更新された教育的資料に関する iGAAP in Focus へのリンクを追加
2025 年 9 月	<ul style="list-style-type: none"> 欧州連合の企業サステナビリティ報告指令（CSRD）およびオムニバス・パッケージに関する更新された iGAAP in Focus へのリンクの追加 欧州サステナビリティ報告基準（ESRS） 	
2025 年 9 月	主な新たな会計上の要求事項	IFRS 第 19 号の修正の説明を追加
2025 年 9 月	新しいおよび改訂 IFRS 会計基準および解釈指針	リストを更新
2025 年 8 月	<ul style="list-style-type: none"> 繰延税金資産の認識および移転価格を含む法人所得税 米国の新税法に関する考慮事項 	(「1 つの大きな美しい法案法」)を追加しました
2025 年 8 月	IFRS サステナビリティ開示基準	ISSB のサポート資料の概要と公開草案の更新

日付	セクション	変更点
2025 年 8 月	・ 最近の IFRS 解釈指針委員会のアジェンダ決定	リストの更新
2025 年 6 月	・ 後発事象 ・ 繰延税金資産の認識および移転価格を含む法人所得税 ・ 金融リスクの開示金利、為替およびインフレ・リスク	報告日後の新しい関税または既存の関税の変更の発表の影響の議論を追加 企業の移転価格の方針の変更についての議論を追加 為替リスクの参照を追加
2025 年 6 月	・ その他の報告に関する検討事項	経営者による説明を追加
2025 年 4 月	・ 世界貿易 ・ 非金融資産の減損 ・ 金融リスクの開示 ・ 公正価値測定および開示 ・ IFRS 第 15 号「顧客との契約から生じる収益」 ・ 不利な契約の引当金 ・ 期中財務報告 – 法人所得税の会計処理	関税の変更を含む、世界貿易の変化の影響を更新
2025 年 3 月	・ マクロ経済と地政学的環境	世界貿易の議論を追加
2025 年 3 月	・ 不確実性と財務報告	非金融資産の減損を追加
2025 年 2 月	・ 欧州連合の企業サステナビリティ報告指令（CSRD）および「EU オムニバス・パッケージ」の概要を追加 び欧州サステナビリティ報告基準（ESRS）	
2025 年 2 月	・ 主な新たな会計上の要求事項	「自然依存電力を参照する契約」（IFRS 第 9 号および IFRS 第 7 号の修正）の概要を追加
2024 年 12 月	・ IFRS サステナビリティ開示基準	「法域ごとの IFRS サステナビリティ開示基準のアドグリフ」のリンクを追加

デロイト会計リサーチ・ツール（DART）は、会計および財務情報開示資料の包括的なオンライン・ライブラリです。

iGAAP on DART では完全版 IFRS 基準へのアクセスが可能であり、以下のリンクがあります。

- ・ デロイトの公式の最新の iGAAP マニュアル。IFRS 基準に基づく財務報告のためのガイダンスを提供しています。
- ・ IFRS 基準に基づいて報告する企業のモデル財務諸表

さらに、iGAAP の [sustainability reporting](#) は、企業の価値を大きく上げができる、より広範な環境、社会的およびガバナンスの事項を踏まえてビジネスが考慮しなければならない、開示要求および推奨事項についてのガイダンスを提供しています。

DART へのサブスクリプションを申し込むには、[ここをクリック](#)して、アプリケーション・プロセスを開始し、iGAAP パッケージを選択します。

サブスクリプションパッケージの価格を含む DART の詳細については、[ここをクリック](#)してください。

Deloitte. トーマツ. デロイト トーマツ

デロイトトーマツグループは、日本におけるデロイト・アシア・パシフィック・リミテッドおよびデロイトネットワークのメンバーであるデロイトトーマツ合同会社ならびにそのグループ法人（有限責任監査法人トーマツ、デロイトトーマツリスクアドバイザリー合同会社、デロイトトーマツコンサルティング合同会社、デロイトトーマツファイナンシャルアドバイザリー合同会社、デロイトトーマツ税理士法人、DT弁護士法人およびデロイトトーマツグループ合同会社を含む）の総称です。デロイトトーマツグループは、日本で最大級のプロフェッショナルグループのひとつであり、各法人がそれぞれの適用法令に従い、プロフェッショナルサービスを提供しています。また、国内約30都市に2万人超の専門家を擁し、多国籍企業や主要な日本企業をクライアントとしています。詳細はデロイトトーマツグループWebサイト、www.deloitte.com/jpをご覧ください。

Deloitte（デロイト）とは、デロイトトウシュトーマツリミテッド（“DTTL”）、そのグローバルネットワーク組織を構成するメンバーファームおよびそれらの関係法人（総称して“デロイトネットワーク”）のひとつまたは複数を指します。DTTL（または“Deloitte Global”）ならびに各メンバーファームおよび関係法人はそれぞれ法的に独立した別個の組織体であり、第三者に関して相互に義務を課しましたは拘束されることはありません。DTTL および DTTL の各メンバーファームならびに関係法人は、自らの作為および不作為についてのみ責任を負い、互いに他のファームまたは関係法人の作為および不作為について責任を負うものではありません。

DTTL はクライアントへのサービス提供を行いません。詳細は www.deloitte.com/jp/about をご覧ください。

デロイト・アシア・パシフィック・リミテッドは DTTL のメンバーファームであり、保証有限責任会社です。デロイト・アシア・パシフィック・リミテッドのメンバーおよびそれらの関係法人は、それぞれ法的に独立した別個の組織体であり、アシア・パシフィックにおける100を超える都市（オーカーランド、バンコク、北京、ベンガルール、ハノイ、香港、ジャカルタ、クアランブル、マニラ、メルボルン、ムンバイ、ニューデリー、大阪、ソウル、上海、シンガポール、シドニー、台北、東京を含む）にてサービスを提供しています。

Deloitte（デロイト）は、最先端のプロフェッショナルサービスを、Fortune Global 500®の約9割の企業や多数のプライベート（非公開）企業を含むクライアントに提供しています。デロイトは、資本市場に対する社会的な信頼を高め、クライアントの変革と繁栄を促進することで、計測可能で継続性のある成果をもたらすプロフェッショナルの集団です。デロイトは、創設以来180年の歴史を有し、150を超える国・地域にわたって活動を展開しています。“Making an impact that matters”をベース（存在理由）として標榜するデロイトの約46万人超の人員の活動の詳細については、www.deloitte.com をご覧ください。

本資料は皆様への情報提供として一般的な情報を掲載するのであり、デロイトトウシュトーマツリミテッド（“DTTL”）、そのグローバルネットワーク組織を構成するメンバーファームおよびそれらの関係法人（総称して“デロイトネットワーク”）が本資料をもって専門的な助言やサービスを提供するものではありません。皆様の財務または事業に影響を与えるような意思決定または行動をされる前に、適切な専門家にご相談ください。本資料における情報の正確性や完全性に関して、いかなる表明、保証または確約（明示・黙示を問いません）をするものではありません。また DTTL、そのメンバーファーム、関係法人、社員・職員または代理人のいずれも、本資料に依拠した人に関する直接または間接に発生したいかなる損失および損害に対して責任を負いません。DTTL ならびに各メンバーファームおよび関係法人はそれぞれ法的に独立した別個の組織体です。

Member of
Deloitte Touche Tohmatsu Limited

© 2025. For information, contact Deloitte Tohmatsu Group.

